
バーサスゴッド ver1.12

久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサスゴッド ver1.12

【Nコード】

N8194Y

【作者名】

久保田

【あらすじ】

VRロボットアクションゲーム「バーサスゴッド」で遊んでいた青野 菜月と仲間達。ある特別なクエストを受注したことにより、彼女達の運命は激変する。硝煙と、鉄の臭いが満ちる戦乱の異世界。その戦いの真つ只中へと飛ばされた菜月達は、そこで人族の王女と出会う。内乱に巻き込まれる菜月達は果たして元の世界に帰れるのか。

一話 やってられるか、こんなもん（前書き）

大量の新規分、派手に変えたストーリーで別物になっているという現実。

コピーして使い回せる分がほとんどなかったです！

一話 やってられるか、こんなもん

星は見えなかった。緩やかな芝生の生える丘の上はスポットライトで照らされ、辺りには光源と音響が設置してある。

バイオリンを構えると強い光が反射して、いちいち目に入って気に食わない。もう少し弱めるか角度を変えてくれ、と頼んだはずが何一つ改善されていない。

屋外で演奏するのは構わないが、音響について考えているのだろうか、という疑問がある。

無駄に大きなカメラが何台も備えられ、自分をあらゆる角度から映そうと構えている。カメラマンは皆、真剣な表情で覗き込んでいた。

「ガキか、俺は」

ぼそつと呟いた言葉は、暴力的な光の中にかき消された。カメラマンはプロの仕事をしているだけなのだろう。

だが、自分の音を聞こうとはしていない。照明も音響も自分の仕事をしているだけ。

それが悔しい。誰も自分を見ようとはしていない。

髭の生えたプロデューサーがスタートの合図。横に立っていた女のキャスターが、話しかけてくる。テレビの画面の向こうでは綺麗に見えたはずが、近くで見ると化粧の塗りすぎでケバケバしい。香水もきつい。

「本日は天才イケメンバイオリニスト、斎藤赤矢くんをゲストを迎えての生放送コンサートです。赤矢くん、緊張してるかな？」

「はい、とても緊張しています」

くだらない、と思った。バイオリニストとして呼ばれたはずが、質問は普段の生活や好きな食べ物の話。まだ駆け出しのような物だが、音楽家 斎藤赤矢としてのプライドがある。

「好きな人はいますか？」

と聞かれた時は恥ずかしさすら覚えた。動物園のパンダだって、もう少しマシな扱いをされるだろう。怒りを覚えるような質問の数々に、赤矢の忍耐が切れる寸前の事だった。

「ではそろそろ赤矢くんに一曲、演奏してもらいましょう。曲は」

あれ、と思った時にはすでに、誰もが知っている大作曲家の、誰もが知っている曲の名前が出されていた。

確かに好きな曲ではあるが、過ぎて自分の演奏とは噛み合わない。そう言っただけ合わせでは、有名ではないが赤矢の色が出る曲で行く事をプロデューサーに納得させたはずだった。

それをこの土壇場になって、無理矢理に自分の意志を押し通そうとするこのやり口。

「ふざけんな……！」

怒りが赤矢の魂を焼き尽くす。恥と屈辱に染まった赤矢は、自重を捨てた。

お仕着せの、微妙に肩の動きを邪魔するタキシードを脱ぎ捨て、趣味の悪いネクタイを引き抜く。だがコンサートの聴衆を待たせるような無様は、どんなに最低の会場でも自分で自分を許せなくなる。カメラの向こうにいる聴衆なんてものは実感はないが、その

一線だけは絶対に守らなければいけない。そう先生に教えられてきた。

それは赤矢の中では絶対だった。

手早く脱ぎ捨てた邪魔な服を、まとめて蹴り飛ばす。コンクールなら一発アウト。しかし、生放送に乱入する度胸はないだろう。慌てるプロデューサーは立ち上がりうとして転び、何が起きていくかわかっていないキャスターは口を開いてマヌケ面。

それでも慌てる事なく、仕事をするカメラマン達に赤矢は自分の口角がつまり上がって行くのを感じていた。プロの仕事は見ていて気持ちがいい。

気持ちいいが、

「俺の演奏も聞いとけよ、てめえら」

と、口の中だけで呟いた。

曲はキャスターが言った曲でも、赤矢が弾こうと思った曲でもない。

日本では知らない人はいないくらいの有名なアニメソングのクラシックアレンジだ。ただし、別なテレビ局のアニメ。

他局の宣伝になるような真似はさせてはおけないだろう。

完璧に曲に入れた、という実感がある。

テンションのままに奏でる曲は、自分で拍手喝采したくなるくらいの会心の出来。更にカメラマンの一人がにやりと笑っているのを見て、ハグの一つでもしてやりたくなった。

「は、はい！ では斎藤赤矢くんの演奏でした！」

曲の半分が終わった辺りで、無理矢理、切られた生放送だが、赤矢の中には、やりきったという手応えと、

「やべえ……菜月キレてんだろっな」

怒り狂う幼なじみを頭に浮かべていた。

「しつげーんだよなあ、あいつ……」

しばらくお待ちください。

リビングのテレビには綺麗な風景と、それだけが流れている。

「こ、こ、こ、このお……バカ赤矢ー！」

せつかくのチャンスなのに！という怒りのままに、青野 菜月は叫んだ。

肩で切ったポブカットが跳ねるくらいに勢いよく立ち上がり、食卓上の味噌汁が揺れる。

「なっちゃん、今は食事中」

「あ、ごめん、きーちゃん」

二人の食卓は静かだ。 斎藤きいろは食事中に喋るのを好まない。食事は静かに、ゆっくりと味わって食べるというきいろのスタイルは、きいろが生まれてからの十四年、崩れたのを見た事が菜月にはなかった。

仕事で両親があまり家にいない斎藤家に、ほとんど毎日のように料理を作りに来る菜月からすれば、味わって食べてもらえるのは嬉しい。

無言で鯖の照り焼きを食べるきいろは、日本人形のような容姿で無表情だが、満足げな空気が漂っていてとても可愛らしい。

「美味しい？」

「うん」

こくり、と首を前に倒す仕草など、あまり他人に懐かない猫が自分だけに懐いたような気持ちを、菜月に与えてくれる。

そのいい気持ちのまま、菜月は味噌汁を口に運ぶ。

うん、今日もなかなかの味……！

「って違うのよ」

さすがに二回怒られたくはない。菜月は静かにツッコんだ。人間は学習するのである。

「……何がですか？」

鯖の照り焼きを片付け、ご飯を噛み締め、更に熱い日本茶を飲んでから、たっぷり五分以上の時間をかけて、きいろは言葉を返してくれた。

食事については絶対にブレないとわかっているから、菜月は言葉を急かしもしなかった。この頑固さはお兄ちゃん似だね、と考えた。

「だってさ、赤矢の演奏もつと聞いてもらえるチャンスでしょ？
なのに、あんな事したら次から呼んでもらえなくなっちゃうよ」

「兄さんなら、好きでやってると思います」

それは菜月にもわかってる。綺麗なお姉さんに質問されている時、口元は笑顔なのに眉がどんどん急な角度に上がって行った。菜月も「もっとマシな事を聞かないのかな」と思うような質問ばかりだったが、それくらい我慢して欲しかった。

「赤矢の演奏は綺麗なんだからさ。もっと沢山の人が聞いた方がいいんだよ！」

「本当になっちゃうんは兄さん好きですね」

きいろの言葉を女子高生、青野 菜月は鼻で笑う。きいろはいつも赤矢と菜月をくつつけたがるが、もうすでにこの程度の言葉遊びでは揺るがない。

「演奏だけはね。アホで性格がどうしようもなく悪い分、神様が哀れんでバイオリンの才能を分け与えてくれたんだろうね」

だから、と思う。それを投げ捨て、その時の気分で崖に向かって走るような事をする赤矢を、すごく勿体無く感じてしまう。好きにやるのはいい。しかし、他人に迷惑をかけて泥を塗るような事をしたら、次から呼んでもらえなくなってしまう。

性格が悪いせいで、あまり友達もない赤矢が心配だというものがある。このまま行けば無職で苦勞に苦勞を重ね、老後は孤独に死んでいく事になるのではないか。

そのときいろが赤矢のそばにいればいいが、こんなにも可愛い子が誰のお嫁さんにならないのは有り得ない。

きつとイケメン、誠実、高収入と三拍子揃った王子様がきいろを迎えに来るはずだ。

しかし、

「お姉ちゃんは簡単に許しませんよ！ きーちゃんが欲しいなら、私を倒してからにしてもらおうか！」

「何の話ですか」

「きーちゃんがお嫁さんに行くなら、私のお目に叶う人じゃないと駄目だからね！」

「兄さんも同じ事を言いそうですね」

「そうだねえ」

性格は歪みきつっているが、あのシスコンっぷりだけは評価が出来る。

そんな事を考えながら菜月はお茶に手を伸ばしたが、空を切った。

9

「おう、最低でも年収は十億な」

「赤矢！？」

「おかえりなさい、兄さん」

「今帰ったぜ」

「それより私のお茶だよ、それ！」

いつの間にか菜月の横に座り、ふてぶてしくお茶を啜る赤矢は、テレビの中で着ていたYシャツと細身のスラックス姿。 だらしなく着崩した格好は非常に見苦しい。

「何その格好。胸が見えるでしょ！あなたの貧相な胸板見せられたって、誰も喜ばないわよ！」

「うるせえ！家に帰ってきてまで、真面目くんぶってられるかんなもん」

オールバックにセットされていた髪もかきむしったのか、山賊もかくやという有り様。

「きーちゃんの教育に悪いの！」

ギヤーギヤーと喚く赤矢を無視して、Yシャツのボタンを閉めていく。せめて、第一と第二ボタンだけは勘弁してあげるのが、出来る幼なじみの優しさだ。

「大体、あんた何してるの！あんな事したら二度とテレビに呼んでもらえないんだからね！」

「はあ？むしろ、こっちからお断りだね。馬鹿と馬鹿が手を繋いで踊ってる中に、俺も馬鹿面引っさげて踊れってか？」

「少しくらい我慢しなさい！」

「やだよ、面倒くせえ」

「この社会不適合者！」

「おー、あほの菜月の分際で難しい言葉使えまちたねー」

「うぎいいいいいい！」

「兄さん」

それまで静観していたきいろが赤矢に声をかけた。静かで平坦な声だが、しつかりとした重さがある。

「なつちゃんは兄さんを心配して言ってくれているのです。それを茶化すのは、どうかと思います」

「う……そうだな」

きーちゃんは私の味方だよね！さすが！と菜月は喜ぶ。

「なつちゃん」

「あれ、私も？」

が、次の瞬間には飛び火していた。

「兄さんは口は悪いですが、音楽はきちんとしています。よほど腹に耐えかねる事があったのでしょうか。あまり言わないでおいてあげてください」

「うー……」

趣味で赤矢が子供の頃から弾いていたバイオリンが、偉い音楽家の先生に見出されたのは中学生の時で、完全な偶然だった。

楽譜もなしに好き勝手に弾いていた赤矢の演奏を聞いた先生が、いきなり斎藤家に乗り込み、

「この子を僕にください！」

と、言ってきたのは今でも語り草だ。白いお髭がよく似合う紳士なのに、その事でもからかうと顔を赤く染めるのが可愛らしいかった。朝から晩まで先生の元でレッスンを受ける赤矢と遊ぶ機会はなくなったが、あまりに嬉しそうであればもう割って入れそうにないな、と思ったのをよく覚えている。

その先生が去年亡くなり、それから赤矢は変わった。どこか気難しくなり、いきなり癪癪を起こす事も増えた。レッスンを受けるにどこかに行く事も、海外留学に誘われても話を迷わず蹴った。

「きいろをお前に任せて、海外に行けってか？ 冗談きついぜ」

あの時はああ言っていた。だけど、今の赤矢には何かが欠けていた。

もし先生がいたら、テレビで無茶をしたりしなかったのだろうか。それとも先生がテレビ局に殴り込んだんだろうか。

赤矢の才能に惚れて、わざわざヨーロッパから日本に移り住んだ彼ならやりかねないな、と思った。

「ごめんね、赤矢」

「……俺も悪かった」

それでもこうやって人に謝れるうちは大丈夫だよな、と菜月は僅かに安心を得る。顔を背けて、謝っている態度ではないにしても、赤矢がいつか壊れてしまいそうな気がしている。だけど、きいろがいるし、何とかなるはずだ。菜月もご飯くらいなら作ってやる。

「赤矢、ご飯食べたの？」

「うんにゃ、何か作ってくれ」

「鯖はもうないし、お肉でいいかな」

明日、赤矢のテレビ出演記念にしようと、なかなかいいお肉を買っていた。残念だな、と素直に思う。ただ、それを表には出せない。

「ああ、任せるわ」

「それが一番、困るんだけどなあ……」

何でもいいが一番困る。それが料理をしない人間には理解出来ないのだろうか。

ぼやきながら立ち上がった菜月の背中に、赤矢の声がかかった。いつも通りの、軽い声で。

「そっぴや明日、日曜日だし、ゲーセン行こうぜ」

赤矢がバイオリン以外に興味を持ち始めたのは、先生が亡くなってからだな。ふとそんな事に気付いて、菜月は答えた。

「いいよ。付き合っただけ」

二話 火にガソリンをぶちまけた

『がたんごん、がたんごん』

昨日読んだ古い本の電車の走る擬音にそんな言葉が使われていた。今日の山手線もいつものように、音もなく進んでいる。いちいち『がたんごん』と音がしていれば、落ち着かない気がするし、何より話すのも大変だろう。

「って事なんだけどなんなの、がたんごんって」

疑問はなるべく早く解消するに限る。勿論、自分で調べるのも大事ではあるが、話のネタにもなる。

「なんなのって言われてもよ」

Tシャツにジャケットとジーンズというラフな格好をした赤矢が頭をかく。赤矢、きいろ、菜月という順番で座っているが、日曜朝十一時の山手線は席の半分ほどが埋まっていた。

「あー……今の電車って全部、リニアだろ？」

「それは知ってる」

苦手教科の物理だが、さすがに磁石で電車を浮かせて走らせる事くらいは知っている。詳しくあれこれ説明しろと言われるのも困るが。

「昔の電車は……あー、リニア方式じゃなかったんだよ」

「じゃあ、なんだったの？」

「……なんだったんだろうな？」

学校の成績はそれなりにいいはずの赤矢が知らないとなると、『がたんごとん』とは、くらむぼんのように、どこかで意味が途切れってしまった言葉なのかもしれない。

菜月が結論を出そうとした時、きいろが口を開いた。

「昔は鉄の車輪でレールの上を直接、走っていたそう、レールの継ぎ目に差し掛かると音を立てていたらしいです」

「へー……何年前の話なんだろう」

「百年くらい前……だった気がしますね」

自分達が生まれる何倍も昔の話。今、こうして存在している物が、昔は無かったと言われても想像しにくい。

電車の窓から見える景色はビルが森のように並んでいる。

二十世紀にあった戦争で東京は焼け野原になってしまった。小学生の時に、授業で見せられた写真は本当にビルも家も何もなくて、これが本当に東京かと驚いた覚えがある。

そこから昔の人が頑張って復興してくれて昭和、平成と時代が流れて行く頃には、すっかり今の東京と変わらない姿になっていた。二十二世紀になった今、電車の『がたんごとん』だけがすっぽりと抜け落ちているようで、菜月はとても不思議な気持ちになった。

「菜月、何をぼけっとしてやがんだ。着いたぞ」

「ん、ごめん」

新宿駅に降りる人の装いは独特だ。バンダナに指抜きグローブ、大きなリュックサックに丸められたポスターが刺さっている人が…典型的なオタクスタイルの人が大勢いる。

菜月達が小学校に上がる前、新宿駅の再開発があったらしい。秋葉原で溢れかえりそうになっていたお店が次々に新宿に移転し、一気に新宿をオタクの街へと変えたのだ。

秋葉原は今も活気に満ちていて、歩くだけでも一苦勞でコスプレをしている人も多いが、新宿と二分化された事により、それでも数は減ったらしい。

「よくよく考えると凄い話だね」

「何がですか？」

「んー……」

菜月は考える。赤矢に言われるまでもなく、自分でも足りない頭だとは理解している。

それでも自分の感じた事くらいは掴んでおきたい。

今日のきいろは、黒のタートルネックのセーターと白いスカート。膝より少しだけ短いスカートから見える真っ白な足と、紺のソックスのコントラストが、背德的でたまらない。

「うへへへへ……」

「……なっちゃん？」

「今のなし。ノーカンでお願いします」

「はあ」

小柄でスレンダーな体型のきいろは、身体のラインがとても綺麗だ。無駄に胸の大きい菜月は、ラインの出る服を着てもあまり綺麗にならない。羨ましいな、と思い、

「きーちゃん、可愛いね」

「……ありがとうございます?」

こうやって可愛いきいろを更に可愛くする服を作り、菜月でもそれなりに見える服を作り、焼け野原だった東京を作り直し、新宿を壊して作り直して。

「凄いね、人間って」

一つのビルを作り上げるだけで、どれくらいの苦労があるのか菜月には想像がつかない。

服の作り方ならともかく布一枚作るのに、何がどう使われているのだろうか。

そういう事を考えて行くと、菜月の言葉では人間が凄いという言葉葉にしかない。

話が飛びすぎて、話に着いてこれなかったきいろは小首を傾げている。ごめんね、と声をかけてから頭に手を乗せると目を瞑り、きいろは身動きを止めた。

「愛いやつよのう、こやつめ」

「うー……」

恥ずかしそうに視線を逸らしても、逃げようとはしないきいろに、菜月のゲージがぎゅんぎゅんと溜まっていく。

その場には人が沢山いる。

それでもときめきゲージが三本溜まってしまった菜月は、きいろを抱きしめようと腕を広げた。

「さあ、お姉ちゃんの胸に飛び込んでおいで！」

「さあ、じゃねえよ」

「あいたっ!!」

頭に衝撃。振り返れば、赤矢が呆れた顔をして、拳骨を作っていた。女の子の頭を叩くという暴拳は許してはおけぬ。

「何すんの！今、きーちゃんとスキンシップを取ろうとしてたのに！」

「うるせえよ。いいからさっさと行くぞ」

不機嫌な表情をしてはいるが、よく聞けば赤矢の声は軽い。プレゼントをお預けされた子供のようなものなだろう。

「ふふん」

「……なんだ、そのムカつく面は」

「いいえー？べっつにいー？」

「うぜえ……」

さっさと歩き始めた赤矢の横に並ぶ。赤矢の浮き立つ気持ちは理解出来ても、だからと言ってからかうのをやめる気は菜月にはない。たまには攻撃の機会が菜月にあってもいいはずだ。

広々としながら、シンプルな道順の新宿駅を歩くと、駅ビルの中のお店について目が行ってしまふ。

「ねーねー、きーちゃん、あの服可愛くない？」

「帰りにゆっくり見ましよう。兄さん行ってしまいますよ」

「えー、でもさあ」

まだ何か言おうとした菜月の手をきいろは取る。

「行きますよ」

「はい」

すたすたと歩いて行く赤矢の背に着いて行き、十分も歩くと駅の構内を出る。

目に飛び込んで来るのは、広々とした道路と、

「相変わらずおっきいねえ」

見上げて、天辺が見えない。

駅の正面にあるゲームセンター。言葉にすればそれだけだ。

しかし、新宿をオタク街に変えた決定的な原因と言われているそのビル。

「三百階立てですからね」

『世界中のゲームを集めよう!』 そんなキャッチフレーズで建設を始めたのは、一つのゲーム会社だった。

「何ぼけつとつっ立ってるんだ、行くぞ」

「うん、ごめん」

駅前の一等地にこんな巨大なビルを作るのには、一体どれだけのお金がかかるのだろうか？

外観は特に変わった感じもなく、ただひたすら大きいだけだ。

しかし、入り口の自動ドアが閉まる暇もないくらいに、次々と人が吸い込まれていく。

きいろと手を繋いだまま、先に行く赤矢を追って菜月も中に入る。

「相変わらず凄いね」

「はい」

肩を寄せ合うような距離でなければ、会話するのにも苦勞しそうな音。ぬいぐるみキャッチャーや、プリクラなど一階はゲームよりもデートをしにきたカップルが多い。

皆あまりこういう所には興味がなく、それらの機械の間をすり抜けて、店の奥に向かう。

七機あるエレベーターの前で、赤矢は菜月達を待っていた。

「今日はバーサスゴッドでいいよな？」

「今日も、の間違いでしょ？」

「そりゃ間違いねえな」

へらつと笑う赤矢の顔には陰はない。こいつ子供みたいだなあ、
と思いながら、菜月は何も言わなかった。にやにや笑いはしたが、
無言で赤矢と睨み合っていると、チンという音。

「よっしゃ、行くぜ！」

「おー」

赤矢の気合いの入ったかけ声に、菜月のそれなりな、きいろの平
坦な声が応える。

エレベーターの扉が開くと中に乗り込む。
目的の階数を押した所で、聞いた事のある声が飛び込んできた。

「おお、菜月さんではありませんか！」

「なんですって!?!」

ドタバタとした足音が一つ、エレベーターに向かってくる。

「よし、閉める」

「えー、せっかく知り合いに会ったんだから、挨拶くらいしようよ。
大人になったら、人付き合いとかしなくちゃ駄目なんだからね？」

「あほのお前が俺に説教すんな」

「あほとはなんだー！」

「左様」

一人は武士、としか言いようがない。 オールバックにした長い髪を後ろで縄、何故か紐やゴムではなく縄で結び、仕立てのいい紺の着流し。 開いているのか、閉じているのかわからないくらいに細い目は隙がなさそうな気がする。

見ている分には何の変哲もない小走りではあったが、その動きは機械と機械の間を人が歩きまわり、せまっ苦しい道をかかなりの速さで抜けて、エレベーターの中に飛び込んできた。

「婦女子にそのような口を叩くとは拙者、武士として許せぬ……齋藤赤矢」

ぴたりと赤矢の前に立つと、二人は睨み合う。 キスしちゃうんじゃないかな、と菜月が思うくらいに顔を近付けていて、きいろの教育によくなさそうな光景だ。

しかし、あまり干渉してしまえば、せつかく赤矢に友人が出来るかもしれないのに、それを邪魔してしまうかもしれない。

菜月は知っている。 男の子は殴り合ったら友達になるのだと。

しかし、バイオリニストは殴り合いをしたら指を怪我してしまうから、棒崩しとかで友達になつてくれないだろうか。

「んだよ、余計なお世話だ、鳥井悪辣。 ……それはそうとして閉めろ、菜月」

「拙者をその名前で呼ぶな！ おぞましきこの名前に負けぬため、拙者がどれだけ立派な武士を目指しているのか教えてやるわ！ ……それはそうと閉めてください、菜月さん」

「あれ、まだ」

「わたくしがまだ乗っておりません！」

白いイブニングドレスに白い手袋、しっとりとした金髪はきらきらと輝く。

見るたびにドリルに似ていると思う髪型は、切れ長の目にやたらよく似合っているが、菜月は彼女の前に立つといつも身が竦む思いをする。

今だつて待たせている身だというのに、彼女の足取りは変わらず優雅。 周りにいた人々も彼女のオーラに負けて道を譲る。

「トリノさん、こんにちはー」

「ご苦労様、菜月」

まるでメイドとお嬢様のようなと思い、菜月は胸中でほくそ笑む。メイドという存在に憧れる菜月だが、きいろは妹的存在であり、赤矢は赤矢であるからして、ごっこでも仕えたくない。

その点、実際にお嬢様のトリノは、菜月の心の中でメイドごっこの最高の仲間だった。 本人に言った事はないが。

トリノがゆつくりと乗り込んだのを確認してから、エレベーターの扉を閉めた。 数人ほどエレベーター待ちをしていたが、誰もが明らかにここに乗り込むのだけは嫌だ、という空気を発していた。

「うふふふ……久しぶりですわね、菜月」

「え、確か三日前にも会ったよね、道で」

「男子三日合わずんば刮目して見よ、と言います。つまり、他者より優れたわたくしなら、三日あれば更に！更に素晴らしい存在になっているという事ですわ！」

大袈裟なオーバーアクションで、海外の女優のように身振り手振りを付けながら話すトリノは、それが様になっている。どこかヨーロッパ系の顔立ちをしているトリノにはよく似合っているが、完璧に日本人顔の菜月ではこうはいかないだろう。

「また始まったでござるな。傲慢と気品を履き違えた愚か者が、我が姉だと思つと反吐が出る……！」

「あら、わたくしも武士ごっこにうつつを抜かす、野蛮極まりない愚か者が弟だと思つと……！」

「相変わらず仲いいな、鳥井姉弟……！」

「誰が仲良し姉弟ですか！」

「誰が仲良し姉弟というのか！」

ぴつたりと声を揃えて、赤矢に抗議する二人は菜月から見ても仲良し姉弟だった。

「私達だって仲良しだもんねー、きーちゃん」

「そうですね」

悲しくなるほど、さらりと流されてしまい、菜月はちよつとしよんぼりした。

「菜月さんときいる殿はいつ見てもお美しいですな！ いやあ、きいる殿はまるで天使のような愛らしさですな！」

「でっしょー？ きーちゃん可愛いつてさ！」

「はあ」

「おっと、そう言えば菜月さん。実は拙者、映画のチケットを頂きましてな。」「ご、ご一緒にいかがでござろうか！ 来週の日曜日ですが！」

将を射ようと思えば、まず馬から射よ。そのことわざ通り悪辣は邪魔な菜月を射てから、きいろを得るつもりだろう。

お姉ちゃんとして、そんな陳腐な手にかかるわけにはいかない。

「ごめんね、忙しいんだ！」

「ぐぬ、別な日でも」

「ごめんね、忙しいんだ！」

「……そろそろお前の弟に、きいろを褒めると菜月が喜ぶけど、口説くには逆効果だつて教えてやれよ」

「あら、これはこれで楽しいじゃありませんの？」

悪辣を必殺の「ごめんね、忙しいんだ！」で押し切っている間に、赤矢とトリノがぼそぼそと話している。

「仲良しだ……！」

「多分、違います」

「あれ？」

「そういえば……鳥井姉弟しかいないのか？」

「むっ」

「ぐっ」

これからプレイしようとしているゲームは三人でチームを作り、別なチームと争うようになっていた。チーム外のプレイヤーを傭兵として入れればプレイする事も出来るが、いきなり組んだ即席チームと、チームワークのしっかりしたチームのどちらが強いかは言うまでもない。

鳥井姉弟のプレイスタイルの穴を埋めるいい狙撃手がいたはずだったのだが、

「……実は彼、学生結婚をしまして」

「嫁を食わせるために、遊んでる暇はないぜ！と言って、チーム脱退して学校も辞めてしまったのでござる……」

「ふおー、すごいねえ」

菜月には想像出来ない話だった。まともに恋愛をした事もない身としては、学校を辞めて働こうと思っただけの情熱はどこから出てきそうにない。

一応は一番近い男ではある、何故かいたりといやらしい笑いを浮かべている赤矢を見てはみたが、ドキドキしたり、こう……恋愛っぽい何かは一切、感じなかった。

「つまり、今日は君達、ウインドノーツの皆様は、お休みというわけですねえ」

あるのは嫌な予感だけだ。

「……なんですって？」

「うちの二十九戦十五勝十四敗でしたっけ？ いやあ、せっかくうちの二連勝で突き放してやろうと思ってたんですが、残念ですなあ」

「いいでしょう……！」

赤矢に煽られ、トリノに火が付いた。

「わたくし率いる『ウインドノーツ』は如何なる逆境にも負けませんわ！ その事を証明いたしましょう！」

「姉上、さすがにそれは赤矢達を甘く見すぎではありませんか？

引く事も勇気でござろう」

「おやあ、さすが卑怯で臆病な悪辣くんですねえ。もう逃げる算段ですかな？」

赤矢のいやらしい笑いと、ねちねちした喋りは的確に悪辣の弱点を突いていく。

「拙者が卑怯で臆病だと……!? いいだろう、拙者の剣の冴え……お主の身で味わうがよいわ!」

このままではいけない、と思った。菜月だけかもしれないが、鳥井姉弟のウインドノーツをライバルだと思っている。

それをこんな形で一人足りないウインドノーツを倒しても、すつきりしないではないか。

「待つてよ! このままじゃ私達が勝つの当たり前だし、もう少し別な形で」

「あら、菜月……なかなか言うようになりましたわね」

「男としてそこまで言われて引き下がるわけにはいきませんな」

「ナイスだ、菜月!」

「あ、あれえ!?!」

チン、と音がして、扉が開いた。

二百九十九階、目的地だ。

当然のようにまずトリノが、そして悪辣が続く。

「叩き潰してあげますわ、『SUNZU river』」

「上等だ、『ウインドノーツ』 負けて泣くんじゃないぜ?」

その空間は、熱気に溢れていた。

三百階の大摩天楼を作り上げた原動力にして、稼働五年目にして未だゲーム業界の最先端。

『バーサスゴッド』

それが、菜月達の戦場の名前だった。

三話 愛以外の理由はない

菜月が両手を広げてても手がまわりそうにもない、かまぐらのような丸くて白い筐体。外見はシンプルそのもので、白地に赤で『V S G』と書かれているだけだ。

それが何台も置かれており、かなりの広さがあるフロアのはずが、圧迫感すら感じる。エレベーターの向かい側にある壁には巨大なモニターが設置されており、試合中のゲームを映している。

勝利の歓声と敗北の悲嘆、ギャラリィのはやし立てる声。しかし、全ての人達に共通しているのは、楽しげな熱気がある事だろうと菜月は思っている。

「菜月、受付終わったぞ」

「はい」

普通のゲームとは違い、ボーリングの受付のように店員に申し込む必要がある。昔、菜月が申し込みをしたら、赤矢が敵チームにいて敵の人が味方にいて以来、申し込みは赤矢がやるようになった。

「じゃあトリノさん、悪辣くん。また後でね」

「ええ、また後で。いい勝負をしましょうね、菜月」

微笑むトリノには何というか空気がある。張り詰めた、張り詰めていながらも、それを楽しむような、そんな空気だ。演奏会の前、赤矢も同じ空気を出している。

その空気に触れるのが菜月は好きだった。

「負けないよ」

「勝ちますわ」

噛み合っではないが、噛み合っている言葉を交わし、トリノに背を向ける。

赤矢はすでに筐体に入ったらしく、きいろだけが待っていてくれた。

「なっちゃんはこっちです」

きいろが指し示してくれた筐体の壁面が縦に割れ、昔の映画に出てきたタイムスリップする車のドアのように縦に開いている。

「ありがとう。じゃあまた後でね」

「はい」

それだけを言うと、きいろは自分の筐体に、頭をかがめて入っていった。後ろから見るとそれなりに短いスカートの中が見えてしまいがちなので、こっそりとガード。

どこか女の子としての意識が薄いきいろはお姉ちゃん的に心配だ。

「よーし……」

毎回、三人が集まれるチームばかりではないし、知らない誰かとプレイしたい時もあるだろう。その時のためにネットワーク回線上のプレイヤーを、傭兵として加える事が出来る。

当たり外れはあるが、強い人が参加する時もある。

そうでなくともトリノと悪辣の腕は、よく知っている。油断し

ていれば間違いなく、こちらが食われる事になるだろう。

「じゃあ頑張ってみよっか」

菜月なりに気合いを入れると、筐体に乗れ込んだ。勿論、スカートの中はうまく隠して、だ。

筐体の中は薄ぼんやりとした明かりに照らされている。真ん中に椅子が一個だけ置かれて、そこに座る。

椅子に腰を下ろすと、頼りない柔らかさを尻に感じる。

『認証タグを入れてください』

何も無かったはずの空間に、紫色の光が文字を形作る。

菜月はポケットから銀色のチェーンに、小指ほどの大きさをした長方形の金属板　タグを取り出し、文字に押し付けた。

手に持っていたはずのタグは音もなく光の粒となり消え失せ、椅子の柔らかさが変化していく。柔らかさは残ってはいるが、硬さも感じるような、しっかりと身体を安定させられる椅子に変化してくれた。

「不思議だねー」

こんな技術は他にはない。車にこのシートの硬さを変化させる機能があれば便利だと思うし、タグが消えるような事は見た事はなかった。

未だに画面があり、スティックとボタンで操作する格闘ゲームが主力の中で、菜月が見てもおかしいと感じるオーバーテクノロジー！

『機体を選んでください』

しかし、菜月の考えを読み取る装置まではさすがにないらしい。毎回、思う疑問に答えるような素振りもなく、どこか機械的な女性な声が次を促してくる。

正面の空間に画面が浮かび上がり、二体のロボットが現れた。

緑色の装甲は全体的に丸っこく、角張っているのは肩のラインくらいだ。口元のむき出しの動力パイプと、サイクロプスのような単眼が可愛い。

もう一機は緑の装甲を艶のあるパールホワイトに染め、ヘルメットのような頭に伸びる小さな角のようなアンテナ。

他に大きな差と言えば、その手に持った機体全てを隠せそうな巨大な盾くらいだろうか。

緑の機体の上には『原型機・ザム』、白い機体の上には『原型機・指揮官用ザム』と書かれている。

ザム、という機体にまつわる逸話が多い。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗ってみたら、やたら多い起動シークエンスで動けないままに終わった。バーサスゴッドは戦場でうずくまっただけでも、遠慮容赦なく敵から攻撃が来る。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗ってみたら、装甲が薄すぎて僅かにかすっただけでザム大破。バーサスゴッドではきっちり全て避けてもらおう事で、プレイヤーに対応してもらおう方針だ。

初心者向けという謳い文句に騙されて乗ってみたら、悲しくなるほどの豆鉄砲で、全弾相手に当てても落ちなかった。バーサスゴッドはそのような場合、最初から上手く相手の装甲の隙間に当てるか、武器を捨てて素手での戦闘を推奨している。

露骨に地面から顔を出し、丁寧にデコレーションされている地雷。それがバーサスゴッドでのザムの一般的な評価だ。産業廃棄物ですらなく、ネタ以外では誰も使わない。

しかし、初めてプレイした時から菜月はザムに乗り続けていた。

癖の無い操縦感は菜月の思った通りの動きをするし、物足りないどころか、動いている気がしないとされる加速はビビリの菜月でも怖くない。弾に当たりそうなら、最初から撃たれないような立ち回りを心掛ければいい。でも、さすがに攻撃力の無さだけは何も言えない。

白いザムは百戦連続で同機体に乗リ続けたボーナスで、指揮官専用ザムにアップグレードされている。

通常のザムより言われてみれば厚くなった気がする装甲、そういえば何か違う気がするけど、ひよっとした気のせいかもしれない推力。全体的にうつつすらパワーアップしている。

下手に腕を振り回すと折れそうだったフレーム剛性がしっかりと、リーダーが付いた辺りはまともなパワーアップだ。

だが、ザムにも利点がある。とにかく安いのだ。

一チーム二〇〇のコストで三機を編成しなければならぬ。ザムのコストは何と五〇。菜月がザムに乗る事で、赤矢ときいろがいい機体に乗れるという利点もある。

「まあ趣味だけどね、結局」

こんなにもザムは可愛いものだから、もっとザム乗りが増えてもいいと思うが、日本全国を探しても指揮官専用ザムを持っているのは現時点で菜月ただ一人。

実質、菜月専用ザムとなっている。

カラーリング設定はランクを上げた者のみの特権だが、低ランクで指揮官用ザムを手に入れた菜月は、専用カラーリングを持つザム乗りとして一躍有名になった。ネタ的な意味で。

「よーし」

強い光の粒が菜月を包む。謎の技術だとは思うが、菜月はテレビがどう映っているかは知らない。まあ使えるんだからいいやの精神である。しかし、チカチカして眼にきつい。菜月はいつもこの時ばかりは目を瞑っている。

光が収まり腕を見てみれば青いゴムのようなパイロットスーツに包まれていた。触れてみると、やはり服の感触だった。

こちらは演出の一つだが、いつの間にか座席の左右には真っ白な操縦桿と、足元にはフットペダルが存在していた。

ぐっと操縦桿を握ると、しっかりとした質感を返し、ぼんやりとした明るさだった筐体。いや、コクピットの中が光に包まれる。

それは光の粒の明るさではなく、空の明るさだった。

雲は太陽を隠そうとしているが、隠しきるほどの大きさもなく、明るい日差しがザムを照らす。

膝立ちの姿勢だったザムを立たせると、ちょうど視線の高さに木々の天辺が見えた。菜月の勘で電柱と同じくらいの高さだ。

「きーちゃんはまだかな。……赤矢はもう行っちゃったか」

立ち上げには機体差があり、ややこしい操作が必要なザムではあるが、きいろの機体は更にややこしい。

その点、あっさりしている赤矢の機体は、スタート前に有利な位置取りをするために、どこかへ消えた。

「ん、来た来た」

菜月の横に光の粒が、人影を構成していく。

数秒も経つと、それは真っ黒な人影を生み出した。

髪も耳も鼻もない人間がいれば、こうなのだろうと思わせる形状だった。菜月のザムとは違い、艶の無い光を吸い込む黒の装甲は、すっくと立ち上がる。

決定的に人体と違うのは、不気味に黄色く光るその両目。正直、悪趣味だよなーとは思ってはいるが、きいろも絶対にこの機体以外には乗らない。手にした機体の身長ほどもある真つ黒なスナイパーライフルは、向けられるのを想像するだけで菜月の背筋を凍らせる。

『狙撃型原型機・ブラックシープ』

額に引つかかるような感覚と同時に菜月の脳内に文字が流れた。きいろの機体名など何度も見たから、カットして欲しいと思う。機体に加速のためのスラスタールはないが、その代わり高い狙撃精度と、設定次第ではどんな動きも出来る高コスト機、という説明も覚えてしまった。

「お待ちせしました」

「よし、行ってらっしゃい！」

「はい」

スムーズな動きで走って行くブラックシープは、森の中へと消えていった。

ランダムに決定されたステージは森林地帯だ。隠れる場所はあるが、高低差のほとんどない平坦なステージとなっていて、狙撃型は活躍しにくいだろう。

「逆に赤矢は生き生きしてるんだろっけどね」

どこかにいる幼なじみを思い、カナダにでもありそうな、リアリティのある景色を、菜月は堪能していた。

まだカウントダウンは始まっていない。

四話 そいつは最高の褒め言葉だ

「きーちゃん、トリノさん達は見える？」

『はい』

きいろの映像がバストアップで浮かび上がるようにして、映し出された。きいろもレモンのようなイエローのパイロットスーツを着ていて、スレンダーなスタイルを露わにしている。

『鳥居姉弟はいつものように初期配置から動いていません。もう一機はすで潜伏したようです』

きいろのブラックシープはこちらの三機の中で、最も遠距離まで見える。開始前からリーダーを起動させる事は出来ないが、このような形で索敵を行うのは、どこのチームもしている事だ。

『Ready?』

開始一分もすると、モニター一杯にその一言が映しだされる。

「おっけー！」

菜月の声に反応し、文字が消えた。三分以内に答ええない場合、ゲームを妨害する行為として強制終了がかかってしまうので、菜月はこの問いには即返答するようにしている。

しかし、最初の位置取りが重要な赤矢ときいろは毎回、時間ギリギリまで粘る。今も機械的な音声が残り時間をカウントしていく。無理はしなかったらしく十秒前にカウントは止まった。

「すーっ……はー」

と、菜月は深呼吸を一つ。肌にはビリビリとくる物は気のせいか、それともトリノの意志でも感じているのか。

『5』

カウントが始まった。

『4』

全ての動作が可能となり、菜月はレーダーを作動させる。脳内の左斜め前に浮かび上がる丸いレーダーには、二つの光点。

『3』

もう一機は見つからない。遠くにいるのか、ステルス特性があるのか。

ステルスでないとすれば、遠くから狙える狙撃型か、ミサイルで
一帯を吹き飛ばす爆撃型か。どちらにせよ注意が必要だった。

『2』

背部と両脚に取り付けられたスラストを、軽く噴かし始める。
温めておかなければ、いきなり動いてはくれないのだ。

『1』

レーダーには残り一機はまだ入らない。相手の連携がうまくい

っていない事を、菜月は確信した。

『闘争、開始』

あくまで無機質な声が戦いの時間を告げると、菜月は、

「撤退ー！」

真っ直ぐに背を向けて逃げ出した。

『待ちなさい、菜月！』

「絶対に嫌です！」

トリノからの通信。 淡いピンクのパイロットスーツだが、表情に桃色の気配はない。

まるで猛禽のような、獰猛な笑みを浮かべており、胸中で菜月はドン引き。

『いいですわ……菜月がそのつもりなら』

来る。 そう思った瞬間にはレーダーの光点が動いていた。 約一キロの距離を、一瞬で、一直線に縮められた。

「あー、もうっ！ 試合中のトリノさんは怖いから嫌いっ！」

僅かの距離も逃げられず、再び菜月のザムは振り返る。

「それはつまり、臆しているという事かしら！」

まるで爆発のようだった。木々を薙ぎ倒し、環境保護団体が目を剥くような光景を生み出しながら視界に入ってきた機体には、まだ速度が乗っている。

銀色の光にしか見えないほどの速さに、菜月は必死にシールドを構え、歯を食いしばった。

「まさかっ!」

僅かに右手へと傾斜を付けたシールドに、思い切りぶち当たったトリノの機体は、勢いよくそちらへと滑って行く。初心者なら速度に振り回され、転倒するだろうがトリノがそのようなヘマをするはずがない。

あっという間にザムを通り過ぎていったトリノを捉えるために、背後を振り向けば、地面には三日月の軌道が描かれていた。

あまりの速度にただ機体を止められず、慣性でスライドし、地面に弧を描いたのだ。

『突撃型原型機・テンペスト』

余計なヘルプが再び流れた。針金に銀色の甲冑を着せたようなフォルム。足はチーターのように細くしなやか。

テンペストの胸や腰のラインが女性的なラインを描いており、背中の中の赤いマントが特徴的だ。

しかし、その名の通り凄まじい瞬発力は、一キロ程度の間合いを一足一刀の間とし、手にした長いランスの突撃を必殺の技へと昇華させる。

「よく受けましたわね!」

「ただのザムとは違うからね!」

最初にあのチャージを受けた時は、爆弾の直撃を受けたように吹き飛んだ。何度も何度も受け、吹き飛ばされながら学んで、指揮官用ザムの上がったフレーム剛性で、こつやつて受け流せるようになった。

その事はしっかりと菜月の自信へと変わっていった。

「トリノさん、覚悟っ」

しかし、

「冗談でしょう?」

手にしたマシンガンをテンペストに放つ。しかし、ランスを体の前に、縦に構えたテンペストは弾丸に当たっても堪えた様子もなく突き進んでくる。バーサスゴッドの機体を全体的に見れば、中の上ほどの装甲を持ったテンペストが相手では、ザムの豆鉄砲程度では牽制にしかない。

比較的、装甲の薄い顔面部のメインカメラや、コクピット位置と設定されている胸部は完璧にガードされており、他に装甲の薄い肘関節などは狙って当たるほど隙間は大きくない。

「ですよねー」

何回戦ってもザムでの攻撃だけは、はっきり言ってどうしようもないし、自信の持ちようがない。

一步。テンペストの踏み込みは、たったそれだけで距離を〇にした。腰の捻り、踏み込みの角度、視線で瞬き一つ以下の時間の中に、フェイントが三つ。

背筋に流れる冷たい汗を意識する暇もなく、見えた現実の中から

勘で最良を選び取り、ザムを必死に横倒しにする。

「往生際が悪い！」

「悪くて結構！」

トリノのテンペストの刺突を必死に避けるが、肩のアーマーが持っていた。衝撃を受け流し、スラスターを全開にし距離を取った。

適当にマシンガンをバラまいての嫌がらせに、トリノは大きくバツクステップで回避。距離を離してしまい失敗した、と思いながらも、菜月は諦める気はない。

「うひー、しんどいなあ」

「むしろ、ザム風情に二発も生き残られる、わたくしのプライドが心配ですわ」

「ひどいなあ、トリノさんは」

そう言いながら、トリノの口元は少し力の抜けた笑み。菜月も似たような笑みが浮かんでいるだろう。

トリノは本人のように真っ直ぐだ。彼女と戦うのは、怖いけど楽しい。

深く息を吸い、ふひゅーと吐き出す。

「トリノさん、私と戦うのは楽しい？」

「ええ、とても」

「あは」

それだけ聞ければ十分だ。短いが、密度の濃い戦闘は最後の局面を迎えている。

菜月はマシンガンを捨てると、腰の後ろのハードポイントに取り付けられている、直刀を抜いた。テンペストのランスの柄ほどもない太さは頼りないが、ないよりはマシだ。

「行きますわよ」

トリノはランスを、まるでビリヤードのキューを構えるように、保持した右手を引き、左手を穂先に添えた。

背部スラスターは全開。赤いマントが羽のようにばさりと広がりに、足をしっかりと踏みしめた。

最大加速の一撃。最初の一撃を成した加速を、この至近距離で受ければどうなるか、などは問うまでもない。

剛性の増した指揮官用ザムでも、まともに受ければ木っ端みじんとなる以外に道はない。

だが逃げるわけにはいかない。震える指先に、ぐっと力を籠めてテンペストの穂先を見つめる。

浅く、しかし、長い呼吸の音が聞こえた。それは菜月か、トリノか。

「い」

から始まる音は二人同時。

「まー」

「きますわー」

トリノが深く踏み込み、菜月は叫んだ。

『中てる』

きいろの声。その前にすでに放たれたのは一発の弾丸。テンプストに向かつて放たれた弾丸は、その銀の装甲を食い破ろうと一直線に飛来する。

深く踏み込んだテンプストは逃れられない。絶対必中のタイミングだ。

しかし、

「愚弟！」

「拙者、参上！」

トリノの動きを見切っていたのは、菜月ときいろだけではない。見切られる事を前提に、反応出来るギリギリの距離に控えていた悪辣が動いた。

『剣術型原型機・烈風』

華奢な鎧武者というのが相応しいような機体も、また速い。トリノの進路を邪魔しないように飛び込むと同時に腰の刀を抜くと、すばっときいろの弾丸を切って落とす。

「甘いでござるなあ、きいろ殿！」

『中てる、と私は言った』

二発目。 烈風の腹を射抜かんとする一発だ。 僅かにブレているが、それでも直撃コースだと烈風の管制CPUは、悪辣に無慈悲に伝えた。

「何という再照準速度か!？」

一発なら防がれる。 だが、短時間の間に二発撃てばどうか。 一発撃てばライフルは反動で跳ね上がり、そこから再び狙いを付けるという作業は一秒以下の時間を削りあう勝負の中では相当に難しい。

だが、あらかじめ狙撃ポイントを設定しておけば、コンピュータに任せた正確な射撃動作が可能となる。 動きまわる機体を射抜くのは難しいが、ある一点に必ず来るとわかっているなら、そこを狙うための動作設定ならあらかじめ出来る。

大抵、攻撃はマニュアルで操作するが、回避や防御は簡略化されたオート動作で動く。 弾丸のような視認するのが難しい速度の物を、マニュアルで切り捨てるのはほぼ不可能だ。 しかし、オート動作はあらかじめ設定された遅延が必ず起きる。

つまり、悪辣がオート動作で弾丸を切り払い、そこで僅かに動きが硬直すると読んでいれば、出来ない事ではない。

ここまでの展開を予想し、対トリノ悪辣のためにきいるが練った策であった。

「まだ……ッ」

しかし、なおトリノは動く。

コンマ何秒を超えた中での判断は逡巡ではなく加速。

悪辣へ向かってのチャージだ。

「殺す気でござるか!？」

「耐えたでしょう」

派手にはね飛ばされた烈風は無傷とはいかず、無残に右の肩から先が吹き飛ばされ、紺地と金で縁取りされた装甲のあちこちに裂傷が走る。しかし、まだ動ける。つまりは戦える。戦えるなら倒す。

「チャンス！」

まともにテンペストのチャージを受けた烈風は、うつ伏せに転がり、菜月のザムから三步の位置。

「卑怯でござろう！」

「なら倒れた相手は攻撃しないの？」

「そりゃするでござる」

菜月は悪辣の返答を待ちはせず、直刀を振りかぶった。華奢で脆いが、さすがに無防備な背中を刺し貫けないほどではない。

テンペストはチャージの勢いを殺し切った所に、きいろが狙撃を撃ち込んでいる。トリノが相手では全て防がれるだろうが、まだ体勢を立て直すまで数秒あるはずだ。

「覚悟してよね！」

「ぬっつ……！」

「カットしなさい……！」

そのトリノの言葉で思い出した、もう一人の存在を。 接近戦をしている敵味方を射撃するのは非常に危険な上、鳥井姉弟のスピードに即席で着いて行くのは難しい。

だが、このタイミングで射撃を躊躇う理由はない。 味方が落とされるくらいなら、狙撃型でも爆撃型でも悪辣ごと菜月を狙ってもおかしくない。

やらかした！？と菜月が軽くパニックを起こした時だった。

「なんなんだ、このふざけた速度！ 俺の機体で着いていけるはずないだろ！？」

トリノのチーム『ウインドノーツ』に傭兵として参加していた彼は、開始早々に置いていかれた。

接近されては非常に厳しい狙撃型の機体を操る彼は、あまり派手には動けない。 そんな彼を置いて、一言もなく猛烈な勢いで前進した二人に怒りすら感じる。

目立たぬように、しかし、それでも必死に走っていた。

『カットしなさい！』

あの傲慢な女からの通信が入る。 一瞬、無視してやろうか、と思ったが、その前にゲーマーの性が、勝手にスナイパーライフルのスコープを覗いていた。

ザムに負ける中コスト機烈風という冗談のような光景に、彼の脳内に嫌な想像が浮かぶ。

「ちくしょう……勝てんのか、これ」

「おい、待てよ。 そいつは聞き捨てならねえなあ」

「誰だ!？」

リーダーには反応がない。 どこか遠くから通信が入ったのか？
彼が考えた瞬間だった。

「逆に考えるよ」

彼の乗った機体の胸に穴が空き、装甲や部品が眼前に飛び散る。
何故?と思った瞬間、何も無かった空間に赤錆のような不気味な
色が浮かび上がった。

「ステルス!？」

「今はそんな事はどうでもいい。 まずは俺の話聞いて」

胸から腕が飛び出していた。 細い、それでいてひよろりと長い
腕だ。

その腕の先には、不釣り合いなほど巨大な五本の鋭い爪。
更にその爪先には、

「おい、待てよ。 それは俺のエンジン……!」

「こういう時は……勝負はまだまだこれからだ。 面白くなってき
たぜ!ってな」

爪の先に刺さっていた機体のエンジン。 器用に指先の動きだけ
で、その手にすっぽりと収めると、

「まあそいつも俺とラスティネイルの前じゃ、何の意味もないんだけどよ」

ぐしゃり、と潰された。

「この……！ 卑怯者！」

腕が引き抜かれ、支えと動力を失った機体が崩れ落ちていくが、一矢報いようと必死に振り返る。

『近接魔術機・ラスティネイル』

「そいつは最高の褒め言葉だ」

だが、それすら許される事なく、赤矢のラスティネイルの双爪が振るわれ、全てを切り裂いた。

五話 天蓋に至る

「これでトドメだよ！」

動けない悪辣の烈風に、菜月は刃を振り下ろし、

「あつれ？」

世界が止まった。

風に揺れる木々も、空を必死に逃げる鳥も、ザムもぴたりと止まった。

遠くを見れば赤矢のラスティネイルが、跳躍している。首の無い胴体に、膝から下のない脚を取り付け、毛のない猿の長い腕を生やしたような姿は不気味な赤錆の色をしていて、菜月はあまり好きではない。

手のひらを爪で構成したような指先は、赤矢の指とは噛み合っていない気がするのだ。

『なんだこれ、フリーズでもしたのか？』

『初めてです』

「聞いた事ないね、こういうの」

バーサスゴッドにはいくつか伝説がある。その一つが「バグが見つかった事がない」だ。

どんなゲームでもどこかしらおかしい部分があり、それを利用したプレイをゲーマーなら一度はした事があるだろう。

しかし、長い間、何万人もプレイしてきたバーサスゴッドでは一

度もバグが見つかった事はなく、開発元のバベル社の公式サイトには「バグを発見した方には、一億円をプレゼントいたします」と書いてある。

「……あれ、ひよつとして」

菜月の物欲が爆発しかけた瞬間、

【これよりチーム『SUNZU river』、チーム『ウインドノーツ』のAランク特殊昇格クエストを行います】

「お、おー！」

『よっしー！』

顔いっぱい笑顔を浮かべる赤矢と、無言だが満足げな雰囲気の子いろ。

菜月は微妙にテンションを上げ損ねた。

Fから始まり、Bまで上がるのには簡単だ。試合終了後のポイントを貯めていけば、勝手に上がる。

しかし、BからAに上がるには、勝率七割以上でなければ上がれない。しかも、自分より大きくランクが下の相手だったり、相手にわざと負けてもらうような事をして意味はない。

かなり難しく、菜月も嬉しいが一億円で比べれば流石にAランク霞む。

そんな菜月の俗物ぶりに気付く事なく、子いろは疑問を口にした。

『でも、まだウインドノーツと決着ついていませんよね？』

【今回、あなた方チームSUNZU riverと、ウインドノーツの同時昇格クエストとなります】

きいろの疑問に反応するように、文字が切り替わり、機械的な音声を読み上げる。

モニターにノイズが走り、菜月がまばたきをした瞬間、世界が一変していた。

美しい森ではなく、どこまでも真っ白な世界が広がっている。

光っているわけでもないが、暗くもない。ただ白くどこまでも広い。

ステージが切り替わり、周りを見ればSUNZU riverとウインドノーツの機体が並んでいた。

【ターゲット・ザムを倒してください】

「私!？」

ではなく白い世界の真ん中に、緑の通常型ザムが現れ、ただ真っ直ぐに立っている。

劇的な演出は、なかった。

「なんだ、こりゃ……やる気起きねえな」

「そうですわね……愚弟、行ってきなさい」

「拙者も何だか弱い者いじめしているようで嫌でござる」

あれ、ザムの扱いひどい!?!と菜月が憤慨していると、きいろが動いた。

「私が」

実行の後、有言。 抜く手を見せぬクイックエイムで、スナイパーライフルを撃つときいろは言った。

発砲音は一発。 ザムでまともに避けられる距離ではないし、きいろが止まっている的を外す距離ではない。

「嘘……」

しかし、未だ目標のザムは健在。 菜月は見た。

「お、珍しいな、この距離できいろが外すなんて」

「よし、では拙者が」

「私が行った方が速いですわよ」

赤矢と鳥井姉弟は気付いていない。 必中を確信していたきいろは首を傾げている。

そして、菜月は自分の見た物が信じられない。

「あ、あの……気をつけて、トリノさん」

だから、菜月の言葉はそれだけに留まった。

「なんですって？ わたくしが……菜月のザム以外にどうにかなるとでも？」

返答は烈火のような怒り。 トリノのテンペストは深く踏み込み、チャージ体勢に入る。

「わたくしの力、しっかりと見ていなさい！」

テンペストは前に出る。そのあまりに速い銀色の光は、見る者に粉々に吹き飛ばされるザムの姿を幻視させた。

「なっ………！？」

トリノの声は驚愕に染まり、それは全員的心境だった。

ザムは一步も動いていない。その後ろにランスを振り抜いたテンペストの姿。

「こいつは一体、どんな手品だ………？」

【目標情報が更新されます】

赤矢の声に被さるように、機械的なシステムの音声が流れる。

【世界ランキング一位、チーム『三千世界』、The ONE『オルマ』の乗る通常型ザムを撃破してください】

それは最強の名だ。バーサスゴッド稼働から、一位の座に君臨し続ける王の名だった。

【なお、彼を倒した場合、自動的にあなた方が一位となります】

「………はあ？」

「ナメられているのでござるか、拙者達は」

赤矢のラスティネイルは何かを振り切るように腕を振り、悪辣の烈風は右手に刀を持ち、腰の後ろからアサルトライフルを抜いた。一対五で勝ったからと言って、自分を最強だと誇れるだろうか。その屈辱は菜月でも理解出来る。

「ナメてはいないさ」

通信。 菜月はバーサスゴッド専門誌でその顔を見た事がある。

落ち着いた茶の髪、それなりに整った細面。 口元は常に笑みを浮かべている。 しかし、パーツは揃っているはずが、どこかズレてチグハグな印象を受ける。

さすがにこんな事を言うのは失礼で口には出せないが、菜月はオルマが食事をしている日常の光景が想像出来ない。

「ただ客観的な事実だ。 今の君達ではボクには勝てない。 その事実をひっくり返してくれるなら、君達に何を与えても惜しくない」

これを他に誰も感じていないのだろうか。 最弱であるザム乗りの性で、相手をよく観察する癖が菜月にはある。

重心が前に傾いていれば前進しようとしているなど、相手の最初の動きを読まなければ、ザムはあっさりと撃破されてしまう。

誰よりも相手を見てきた菜月が、オルマの動きが予想出来ない。ただ立っているだけのオルマに菜月は肌を粟立たせながら、モニターに写される味方の顔を見る。

「上等だ……！ 絶対に吠え面かかせてやる」

赤矢は鬪志を剥き出しに、

「貴様と足並みを揃えるのは屈辱だが、合わせてやる」

悪辣は比較的、冷静だがそれでも怒りを覚えている。

きいろのブラックシープはすでに狙撃体勢。膝立ちで静かに照準を合わせている。

トリノは無言。しかし、怒りを抑え、ギラギラと輝く目が恐ろしい。

「行くぜ」

始めは赤矢が動いた。ラスティネイルは長い腕で地面を突き刺し、身体を引きつけるようにして走る。

その背後にぴたりと悪辣の烈風が追走し、ラスティネイルを壁に自分の動きを隠す。

「ああ」

と、菜月は嘆息する。

ラスティネイルの強烈な刺突、時間差をつけた烈風の斬撃。背後からのテンペストの全力チャージ。駄目押しとばかりに、ブラックシープの二連狙撃。

この暴虐な力の塊を前にして一体、誰が生き残れるというのか。

『それじゃボクには届かない』

ラスティネイルの爪に、ザムがそつと手を添えれば、爪はあらぬ方向に吹き飛び、その先にある烈風の刀を弾く。

弾かれた烈風の刀はテンペストの足を引っかけ、無様に転倒させる。ブラックシープの二発の弾丸は、テンペストのランスの柄に当たった。

「綺麗だなあ……」

全員の攻撃をたつたの一動作でひっくり返したオルマの技量を、菜月は想像の中ですら超えられない。

機体任せのオートで動いておらず、フルマニユアル動作なのだろう。極めたマニユアル動作が、ここまで凄い物だとは思ってもみなかった。意識が全てオルマの動きに吸い込まれていく。

人間は普段、歩くという動作に特別な意識を払わない。それがオート動作だとすれば、どここの筋肉をこれだけの力で、こうやって動かすと全て命令を出すのがフルマニユアル動作だ。

射撃や格闘をマニユアル、移動や回避をオート動作に任せているが、オルマのザムを見ているとオート動作の無駄がよくわかる。

力のロス、重心変化の歪み、体幹バランス、動きの連動。菜月はそれ以上の微細な変化を知った。

フルマニユアルに設定を切り替え、ただオルマの動きを真似ている。誰かが菜月を呼ぶ声がある。だけど、それに応える余裕はない。

菜月以外の全員がオルマに翻弄され、そして菜月にオルマの動きを見せてくれる。

操作量が拡大に増えるフルマニユアルに手こずり、自分でも苛立ちを覚えるくらいに無様な動き。だが苛立ちを抑え、亀のようにのたのたとした動きでオルマに追従する。

ブラックシープの大口径ライフルから放たれた弾丸に触れたオルマは、その運動力を受け流し、繊細な指使いでテンペストの方向に飛ばす。

ラストイネイルの爪をぽんと叩くとぽきんと折れ、烈風の両腕を取ると一瞬、遅れて突撃してきたテンペストに投げ飛ばし、激突させる。

全ての弾丸を撃ち尽くしたブラックシープは、近接戦闘用のダガーを抜き、走り寄るが結果は言うまでもない。

誰の見せ場もなく、戦闘は一方的に終了した。

『充分に見れたかい？』

「はい」

『それじゃあ来るといい』

「はい」

仲間を倒された怒りはない。ただ叩き込まれた大量の情報を処理するだけで、菜月の脳はパンクしている。涙が出そうなくらいの目の痛みと激しい頭痛は、菜月の脳が一片のリソースも残していない証拠。ここからはただ動く事だけに集中。それ以外を考える必要もない。

いつの間にかシールドと直刀を足元に落としていた。だが、武装の重量バランスの変化を加味した上で、オルマの動きを再現出来る能力は、今の菜月にはない。構わない。歩かない。

ただそれだけの事が、こんなにも難しいと、菜月は知らなかった。足を独立したパーツとして見るのではなく、内臓の鼓動すら利用すれば、何倍も効率よく動ける。オルマの劣化コピーにしか過ぎない一歩だが、菜月は自分が進化していると実感した。

一歩、二歩、三歩。

進むたびに菜月は先へ進む。知らない地平へ向かうような、心細いような、浮き立つような。

倒れ伏す何かが邪魔だが、今の菜月なら身体の軸をブレさせる事なく、踏み越えられる。

色を失った視界の中で菜月はいつしかザムになっていて、ザムは菜月だった。そして、ザムはザムでありながら菜月ではなく、菜

月もまた菜月ではない。それはもしそうであるのなら、届くという事であり、銀河を流れる星々はシャケの切り身だった。海の底にはマグマのような羊が、カレーを作りながら待っている。きつとそれは神の形であり、アーモンドだ。

「あ
」

ぶつん、という音と、

『惜しい』

というオルマの案外、軽い声が菜月の耳に残った。

六話 負け犬に落ちる

「きゃあっ!」

「きいろ! ……菜月!？」

赤矢は信じられない物を見た。倒れるきいろのブラックシープを踏み潰し、滑るように走るザムの姿。

きいろを猫可愛がりし、誰よりも大事にしている菜月がゲームの中とはいえ、何の躊躇いもなくそんな事をするとは。

「てめえ、何をしてやがる!」

そう叫びながら、本当は気付いているのだろう、と赤矢の中の冷静な部分が分析を始める。そこを起点にコンサートで失敗した時を思い出し、自分の中に冷静な場所を作り上げた。

いつもにへらにへらと笑っている菜月が完全に無表情で、操縦桿を握っているのは有り得ない。きいろを傷付ける菜月も有り得ない。有り得ないなら、あれは菜月ではないか、何かをされている。オルマに弄ばれるように転がされたラストイネイルは、右腕をもがれ、左の爪も折られた。人体のバランスをしていないラストイネイルは腕が無ければ、まともに立ち上がれもしない。

身を焼かれるような屈辱はある。

しかし、同時に思う。

これはゲームだ。

そこまでムキになる事じゃない。赤矢の冷静な部分が、そう囁く。一晩くらいは身悶えして眠れないかもしれない。

菜月だって、そこまでひどい事になっているわけがない。ちょっと今は少しおかしくなっているだけ。ちょ

たかだかそれだけの話だ。

『あっ』

『惜しい』

オルマの眼前にまで辿り着いた菜月が、糸の切れた操り人形のよ
うに崩れ落ちた。前に進む力は消えず、その先にはオルマ。
腕を広げる緑のザムに、ドレスのように白いザムが飛び込むよう
で、

「てめえは菜月に触るなアアアアアアッ！」

残った左腕で地面を全力で殴りつけ、ラスティネイルの推進力を
生み出す。

『おっと』

コンマ一秒かからず、赤矢の冷静な部分は焼き切れ、飛びかかる
が、オルマの右腕に受け止められた。
圧倒的な機体のパワー差があるはずだが、オルマは左腕で菜月を
抱きかかえる余裕付きだ。

「離せ。そして、死ね」

『どちらも断る、と言わせてもらおうか』

「てめえのにやけ面に穴空けてやる！」

『やれやれ、君が一番退屈だ』

拮抗していたはずの力が、ふっと抜ける。まるで地面との運命の絆で結ばれているかのように引き寄せられて、赤矢は地面と深い深いディープリキスを交わした。

バーサスゴッドをプレイして来た中で、感じた事のない振動がまともに赤矢をシェイクし、目の前に火花が飛び散り、気付けばシートから投げ出されていた。

面倒くさがらず、毎回シートベルトはするべきだったと浮かぶが、それも焼け落ちた。

『何の策もなく、ただ力任せ』

外部の状況を伝えるセンサーが知らせる前に、赤矢の身体に振動と衝撃が走る。ラストイネイルの腰を、ザムが踏みつけている。

『後先を考えない特攻』

腰を落としたオルマがラストイネイルの左腕に手をかけた。

『これを退屈と言わずに、なんと叫ぶんだい？』

ぼき、と軽い音を立てて、左腕がへし折られた。菜月と赤矢の左腕を抱くオルマのザム。

声もなく、赤矢は身体をシートに戻した。モニターは赤矢の血で赤く染まっている。

鼻血が頭からの出血かはわからないが、この熱が外に出て行くのは大歓迎だ。

「てめえがどう思おうと知るか……!!」

視界を赤く染めるほどの怒りが籠もっている、オルマの泣き顔が見れない。

少し血を抜いておかなければいけない。

「泣かす！」

『それは楽しみだ』

ラストイネイルは足だけでは立ち上がれない。しかし、立ち上がれないのなら、転ぶようにしてぶつかってやる。

だが菜月とオルマの間に身体を投げ出すが、最大速度でも当たらなかった攻撃が、満身創痍になった今、どうにかなるはずがない。

『だけど、百年早いどころの話じゃないね』

再びあっさりと地面に叩き付けられた。

腹に響くような振動、赤矢を見るオルマの視線は何も期待してはいない。

ただ淡々とベルトコンベアに流れてくる機械を組み立てるように、赤矢を叩き潰してくれている。

殺す。

これまでに味わった事がないほど、苦い屈辱が口の中に広がる。

純度百パーセントの殺意がこういう物か、と新しい発見。赤矢の何かをどろどろに溶かし尽くすようなそれが、ラストイネイルに混ざり合っていく。

ばきばきと自分を内側から砕く音が聞こえた。

『ほっ』

調子に乗りやがって、という言葉は吐かない。この殺意が外に漏れ出してしまえば、届かなくなりそうだった。血も止まっていた。

代わりにコクピットの中に、火の粉によく似た赤い光が散るが、なんだこれと思う思考すら燃え尽きる。

何を考えたか、オルマは数歩、赤矢から下がった。

あと少し、そこにいれば喉笛を噛み千切ってやれたのに。そう思いながら、赤矢は”四つ脚で”立ち上がった。

『これはまた、変わった魔術の発現だ』

オルマの嬉しげな声が癢に触る。炎のように赤い、いや、炎そのものとなったラスティネイルの腕が真つ白な地面を焦がしていく。自分を焼いていくほどの熱量は痛みすら与えてくれるが、焼き切れそうな意識をつなぎ止めるにはちょうどいい。

赤矢は今、炎の狼と化していた。

四つ脚で音もなく燃え盛るその身はザムより巨大。

鋭い爪は相手を傷付ける以外の用途はなく、牙はあらゆる装甲を焼き払い、穿つだろう。

「殺す」

声は人の出す音ではなかった。狼の唸り声に似た何か赤矢の喉から飛び出した。

しかし、唐突な状況の変化への戸惑いはない。

あるのはオルマを食い千切ってやれる力を手に入れた喜びだけ。

『はっ』

楽しげな笑みでありながら、オルマにはどこか暗さがある。それが何なのか理解出来ないまま、赤矢は炎と化した爪を振るった。

大気すら燃やし尽くす圧倒的な熱量は、あっさりとオルマのザムの腕を切り落とし、地に落ちる前に蒸発させた。しかし、ギリギリ避けられ、胴体部は無傷。

『まるで獣のようだね』

操縦桿はいつの間にか消え、赤矢は自らの四本の脚で直接、地面を踏みしめていた。

オルマの腕を切り落とした感触は、何物にも代え難い快感。大気すら焼き尽くしている赤矢の耳に音は感じない。

しかし、それでもオルマが涼しい顔をしているのが、何となくわかった。

熱を持つザムの中で、下腹の一点だけは熱が変わらない。あそこにはオルマがいる。

これはゲームだったはずだ。実際にそこにオルマがいるはずはない。

そんな冷静な考えは一瞬で火にくべられた。赤矢は音もなく雄叫びを上げた。乗せたのはただ殺意。全てを燃やす熱量なら、如何なる技も関係はない。

目標は一点、コクピット。

この炎に焼かれても、涼しい顔でいられるか試してやる。

『さあ、おいで』

というオルマの声に、赤矢は何かを手放す。

狼という形すら消え、全てを飲み込まんとする大蛇のように身をくねらせ、オルマにその牙を突き立てようと動く。

それは確かに斉藤赤矢という存在の最速にして、最高の一撃だった。

『でも、それじゃ』

二人は交差する。

「あほかあああああああ！」

「うほらー！？」

気付けば赤矢は腰を下ろしていた。

横っ面には何故か衝撃と、

一拍置いてのひりつくような痛み。
その痛みを与えてくれた出所は、それまでぴくりとも動かなかつたはずの菜月のザム。

オルマに抱き抱えられながら、拳を突き出している。

「あんたの手は人を殴るための手じゃないでしょうが！ あんたの手は誰かを幸せに出来る手なんだよ！」

菜月は泣いていた。赤矢を睨み付けながら、ボロボロと涙を零す姿は、見ていて気持ちのいいものではなかった。

『動けるのか、もう』

「うるさい！ いつまで搦んでるのさ！ 乙女のウエストを搦むなんて最低でしょ！」

『あ、いや………すまない』

「……お前、色々な意味ですげえな」

何だかもう色々吹き飛ばしてしまった菜月に、赤矢は心から言った。

「うるさい、バカ！ あんたの方が凄いだよ！ なのに何やってんのさ………何で投げ捨てようとしてんの！」

「あー、いや、その、お前を助けよう」と

「言い訳をするなー！」

「ぐおっ!？」

菜月のザムの放つ腰の入った右ストレートは、ラスティネイルの装甲をべこりとへこませた。

コクピット近くに着弾した拳に、赤矢の心胆はこれまでにないくらい冷える。

しかし、反論する気は起きなかった。二発目がコクピットに当たらないという保証はないのだから。

「大体、途中から忘れてたでしょ、私の事」

「そ、そんなはずないじゃないですか、ハハハ」

「嘘でしょ。本当にいつもいつもあんたは、怒ると見境なくなるんだから! ………………つぶ」

菜月の動きが止まり、

「おろおろおろおろおろおろおろおろおろおろおろおろおろおろおろおろ」

それは滝のようだった。菜月の口から、女子高生が出してはいけない勢いの吐瀉物が吹き出す。

通信越しで見ている赤矢のコクピットまで、酸っぱい臭いが漂ってきたそうなほど、大量のゲロだった。

「なにこれあたまいたいし、目いたいし、あちこちいたいしおろおろおろおろおろおろおろおろおろ」

「うわあ……………」

誰が言ったかはわからない。しかし、誰もがうわあ……としか
言いようがない。

「な、なっちゃん大丈夫……？」

「駄目」

「だ、大丈夫でござるよ！ 拙者、ゲロ塗れの菜月さんも素敵だと
思つてござる！」

「……………悪辣くん、嫌い」

「何故!？」

「何故、そんな事を言おうと思つたのか、教えて欲しいくらいです
わ……………」

「バカだろ、お前」

赤矢は思わず吹き出し、肩から力が抜け、操縦桿から手を離れた。

『ふう、困つたね』

「あ?」

困つた、という以上の感情を赤矢は、その言葉から見つけられな
い。

オルマは溜め息を一つ吐く。

『闘争の空気が死んでしまった。ここから仕切り直しという感じではないね』

赤矢とて言いたい事も、聞きたい事も山のようにある。

だが今から何を言おうと、ゲロ塗れが一人いるだけでシリアスな空気も霧散してしまうだろう。

怒りはまだある。しかし、燃え上がりはしない。

『そうだ』

「いや、もう何かいいわ」

『闘争の空気がないなら、闘争の中に落とせばいい。そうは思わないかい？』

「もう帰って飯食って寝たい気分だな」

『それはボクには都合が悪いんだ』

オルマは指を鳴らした。

それだけで白い世界は切り替わる。

荒野だった。地肌がむき出しとなり、多少の起伏はあるが、平地の真ん中に赤矢達はいた。

「なんだ、おい」

「……戦場、ですか？」

右手を見ればザムの大軍が銃を構え、左手を見ればフロッグスケルトンという蛙の頭とドラム缶に似た胴体を持つ機体の大軍が銃を

構えている。

そのど真ん中に、赤矢達はいた。

ザムもフロッグスケルトンも、風に飛ばされる葉も時間が止まったかのように動いていない。

「……おい、まさか」

『ここはボクの作った世界。君達の住む世界とは違う異世界』

オルマは言う。

『ひたすら争い合う運命だけを与えて、ひたすら戦うための世界だ』

「待て」

『ここなら君達の進化を促せるだろうか。それとも戦場に屍を晒す事になるのか』

「ふざけんな！ 神様気取りか、てめえ！」

『気取りじゃないさ』

オルマはもう一度、指を鳴らした。

『神様なんだよ、ボクは』

「撃てエ！」

「放てエ！」

そして、全てが動き出した。
戦場に大音声が木霊する。

「ヤバい……！」

『そうだ。 サービスで機体とコクピットの汚れは直しておいたよ、
ハハハハ』

「気使うなら、もっと違う所に気を使えよ！」

いつの間にかオルマは消え失せ、赤矢は虚空に言葉を返した。
見た事もない量の銃火が飛び交う中、五人は異世界に放り出され
た。

七話 逃げるが勝ち

視界に映る物に大した差違はなかった。ラスティネイルの足元に咲く名前も知らない黄色い花も、少し寒さを感じそうな冷たい風も、赤矢は知っている。

しかし、左右からザムとフロッグスケルトンに挟まれている状況は知らない。

ザム側はざつと百機、フロッグスケルトン側は五百機ほどか。数える暇はないからどんぶり勘定だが多少の間違いがあった所で、たつた五機で倒せる数ではない。

オルマはサービスのおまけのつもりか、機体を屈ませればギリギリ弾が当たらないであろう、それなりに深くて広い窪地に赤矢達を出現させていた。

しかも、それもどちらかが近付いてくれば終わりだ。

「異世界、ですの……」

「とオルマは言ってたけどな。実際、どうかはわかんねえ。まだゲームの中で外から見て笑ってるかもしれないな」

どこかぼんやりしたトリノの言葉に、赤矢は考えを述べるが、

「判断材料がありません。保留にいたしましょう」

「そうだな」

結局の所、そうするしかない。赤矢の中に結論はあるが、それを論ずる暇はない。

「どちらかを突破」

「無理だ。絶対に被害が出る」

異世界という名の現実なら、撃墜されてしまえば死ぬ可能性がある。

「突っ切って、両軍の正面から抜けるしかない」

「それしかありませんわね」

結論はお互いに最初から出ていても、こうして議論したという事実が必要だった。

トリノと悪辣の『ウインドノーツ』、赤矢ときいろと菜月の『SUNZU river』は仲間ではない。

どちらかが相手の主導権を握ろうとすれば、必ず反発が起きる。そんな場合ではないとわかっていても、ならどっちが下に着くかを決めるにはどうしたらいいというのか。

今はまだザム側もフロツグスケルトン側も、赤矢達を直接的には狙ってきていない。

ゲームのCPUならとにかく襲ってくるだろうが、いきなり戦場の真ん中に現れた赤矢達にどちらも迷っているのだろう。

しかし、下手な動きをすれば必ず撃ってくる。赤矢達が敵ではないという確証はないのだから。

「む、交渉するわけにはいかんでござるか」

「わたくし達のために戦いを止めるとお願いしますの？ 少しは考えて話さない、愚弟」

「やる気満々の所にちょっと通らせてくださいね、とでも言いつつも
りか？ あほか」

「拙者、そこまで悪い事を言っただでござるか!？」

愚かな悪辣の意見は無視である。

「でも兄さん、どちらかにそちらの味方をするから、そちらからは
攻撃しないでくれと交渉するのはどうでしょう?」

「それを交渉相手が信じてくれればいいんだが、俺なら信用しない
と思う。でも状況が変われば、それも悪くないはずだ。そこに
気付くとは、さすがきいろだな」

「うちの愚弟と交換したいくらいですわ。きいろ、わたくしの家
の子になりませんか?」

「拙者の扱い、どうなってるんでござるか!？」

「うるせえよ。さて」

「わたくしが先頭で行きますわ」

「いいのか?」

「むしろ、わたくしのテンペストは先頭以外、出来ると思ひまして
?」

「無理だよな」

テンペストの瞬発力は相当な物だが、逆に全力突撃をせず普通に歩くとゆっくりとしか動けない。

テンペスト乗りの腕はどれだけ、最高速を維持していただけるかで決まると言われるほどだ。

「次は烈風、ブラックシープ、ザムの横一列。最後尾は俺だ」

「すみません、狙撃型で……」

「適材適所ですわ。きいろの活躍の場は必ずあります」

機動力も防御用の装備もないブラックシープは、このような突破戦には不向きだ。

しかし、接近戦が得意な機体が多い中、まともに戦うとなればブラックシープの狙撃は必ず必要になる。

トリノのフォローに赤矢は視線で感謝を告げた。

「愚弟、構いませんわね？」

トリノはさつと目を逸らすと、それだけを言った。

思わずにやけそうになる表情筋を必死に自制。

「女子を守って戦うのは武士の誉でござる！ はっはっは、拙者に任せたまえ！」

悪辣の烈風は最高速こそテンペストには及ばないがその分、肩と腰に取り付けられている特徴的な、鎧武者のような装甲はなかなかの物だ。

これで悪辣がチラチラと菜月の方を見て、視線でアピールしていなければ心から頼りになるのだが。

「なっちゃん？」

「へ、なに？」

ザムは低スペックだが、そのシールドだけは大した物だ。
テンペストのチャージを受けて、機体がバラバラにされてもシールドだけは無傷で残るほど。
しかし、

「お前、大丈夫か？」

普段は健康的な肌の白さが、誰が見ても不味いくらいに青白く染まっていた。

大粒の脂汗を流し、息もマラソンでもしてきたかのように荒い。

「頭痛い……でも、頑張る」

「あー……」

休め、と言いたいが状況は切迫している。

頭上を飛び交う銃火の密度が徐々に濃くなり、バズーカの砲弾も飛び交い始めている。

よく狙って撃つより、とにかく弾丸を撃ちまくるほうがいい距離まで近付いている証拠だ。

「……無理すんなよ」

「うん」

だから、それだけ言った。　そう言うしかなかった。

「……赤矢のラスティネイルも、防御に優れた機体ではありませんわよね？　何とかありますの？」

ステルスと爪が特徴のラスティネイルに、防御という言葉は基本的にない。

装甲も場所によってはザムより脆い。

「ああ、多分なんとかなる」

「わたくしが先頭だからと言って、ここで遠慮するのは愚か者のする事ですわよ。　それは責任ではなく、考えなしですわ」

先頭の危険性は言うまでもない。　そして、最後尾も。　ウインドノーツで先頭を背負ったから、SUNZU river が最後尾という考えも確かにある。　だが、それ以上に、

「いいや、これがベストだ。　俺なら何とか出来るさ」

「なら信じますわ」

問答はそれで終わった。

バーサスゴッドはどれだけ出来がよくても所詮はゲームだ。　しかし、そのゲームの中で互いがどうという人間なのかわかる程度には争ってきた。

どこまで出来て、何が出来なくて、こういう場で無駄な言葉を重ねる必要がないとわかる程度には、お互いを知っている。

「カウント、任せますわよ」

「任された。 5」

高揚はない。

「4」

きいろは僅かに顔を俯かせている。

何か声をかけてやればよかった、と後悔するが、気付くのが遅かった。

「3」

悪辣は口を一文字に結んで、眼前を見据えている。

黙っていれば多少、アクの強いハンサムなのに喋れば残念な感じになる。 どうせならずと黙っていればいいだろうに。

「2」

菜月は明らかに体調が悪そうだ。 早くどこかで休ませなければ不味いだろう。

大した働きも出来そうにない。

まあそれも、

「1」

俺が守ってやれば問題ない。 きいろも守る。 余裕があればト
リノも悪辣も守ってやる。

絶対にこいつらを返してやるっ、と赤矢は胸中で呟いた。

「行きますわよ、テンペスト！」

七話 逃げるが勝ち（後書き）

バランスが悪いので短め。

八話 満足させていただけます？

鳥井トリノは正真正銘のお嬢様である。

人からお嬢様と呼ばれ、自分でもそうあろうとしていた。

お嬢様という存在は商品であり、結婚相手と呼ばれる客が満足出来るだけのクオリティが無ければいけない。

お花に乗馬、お琴にバイオリンと色々なお稽古をこなしてきた。

その事自体に特に不満はない。鳥井の家は代々、金持ちではあるが、世界有数というレベルではない。

日本国内で上から数えた方が早い、せいぜい中の上。出る杭にならないように、余所からの嫉妬をもらわないように、と微妙な立ち位置を確保し続けている家だ。

鳥井の家のよくも悪くもおっとりした気風は嫌いではないし、これまで育ててもらった恩というのも、政略結婚くらいはしても構わない程度にはトリノは感じている。

それと同じくらい、

「素人ですわね」

飛び出したテンペストに銃撃が集まる。しかし、テンペストを捉える火線はなく、全てトリノが通った跡に着弾。

テンペストのスピードに照準が着いて行けず、完全に遅れて撃たれたものだ。

お花に乗馬、お琴にバイオリンの稽古も悪くはないが、

「あはっ」

自分の力を使うのは、楽しい。

チャージのタイミング、速度を一回毎に変え、進路を左右にズラ

すだけで誰もトリノに当てられない。

加速するたびに身体がシートに押し付けられ、視界が狭くなる感覚は言葉にならない快感を感じ、機体を失速させないように操る難しさはたまらない。

バーサスゴツドを始めたのは、赤矢に影響されたからだだった。

自分の商品価値を上げるためのお稽古でコンクールにこそ出てはいなかったが、中学時代から出場し、国内の賞を総なめにした赤矢の名前くらいは聞いていた。

曲は鬱屈を感じて好きではなかったが、それでも同年代に凄い相手がいたものだと思っていたし、海外留学しないのが不思議なくらいの腕前を持っていた。

しかし、ある日を境に赤矢の名がぱったりと耳に入らなくなる。

気になって人を使って調べてみれば、毎日ゲームセンターで遊んでいるという話だった。

「あら」

ザムの何機かがテンペストを捉えるコースに弾幕を張り始める。ただスピードとフェイントだけでは、さすがに対象しきれそうにない。

ランスを横薙ぎに振るい、銃弾を叩き落としていく。多少、落とし切れなかったがザムのマシンガン程度では、下手な所に当たらない限りはテンペストにダメージはない。

最初は有名人と遊んでみたい、と思った程度のミィハー気分だった。

曲は好きでないにしろ、赤矢の音は不思議と耳に残っていたし、同年代で活躍しているという親近感もあった。

「ザムを使うなら……」

しかし、すぐに赤矢への興味は失った。

「菜月くらいにはやってみなさい！」

チャージの方向を直角に曲げ、ザムの群れへと向ける。

脚が軋むが、まだ折れる限界点は遠く、操縦桿をそっと操り、荷重を分散させた。

進路上のザムは慌てふためき逃げ惑い、中には無様に背中を向け転ぶ者まである。

「つまらないですね」

ザムの中に人の気配がある。これがCPUなら、ここまで慌てる事はないはずだ。

失った赤矢への興味は、すぐに菜月へと移った。

どれだけ叩き潰そうとも再び立ち向かってくる菜月は、絶対に同じ負け方をしない。

毎回、何らかの進歩が見え、最近ではきっちりいなして反撃までくわえてくる。

それが楽しくて仕方ない。

無造作に近付いてきたトリノに、数機のザムが銃口を向けてきた。半包围されての銃撃はさすがに防ぎきれはしないだろう。バツクステップで距離を取ってしまえばそこまでだが。

再び反転し、ザムからフロッグスケルトンに進路を取る。

『魔術・フロッグスケルトン』

魔術機ではなく魔術。

細かい部分にさほど興味はないが、ザムの群れにしたように突っかけても反応がない。

怯えのかけらもなく、ただ反射で銃を向けてくるだけのフロッグスケルトンに興味は抱けそうにない。

鳥井トリノには敵が必要だ。

「うっ……また吐きそう……」

「が、頑張ってください、なっちゃん」

明らかに動きに精彩を欠いている菜月を支えるようにして、きいるのブラックシープが走る。

オルマとの戦いで見せた動きは何だったのだろうか、と適当に陽動をかけながらトリノは考える。

トリノが手も足も出なかったオルマに、菜月が一番近付いていた気がする。

それはトリノに負け続けていた菜月が、トリノの前に立ち、更にトリノを置いて先に行ったという事ではないだろうか。

「ゾクゾクしちゃいますわね……！」

これがライバル、これが強敵。

成長する菜月を更に成長したトリノが討ち破る、というのは想像するだけで背筋に震えを感じる。

お嬢様生活は嫌いではない。しかし、争い戦うのも嫌いではない。

このような弱い者いじめは嫌いだが、正々堂々と強者と渡り合うのは気が狂いそうなほど耽美な遊戯だ。

「そこのお主！」

そう、彼のような強者が相手なら。

そろそろ下がろうかと思った瞬間、銃火の響きよりも響き渡る大
音声がトリノに叩きつけられた。

張りがあり、その太い声には自信が溢れている。

「わたくしですの？」

外部スピーカーを使い、言葉を返す。

しかし、

「おなごか……！」

返答は無礼そのもの。

『ティターン族』

ヘルプは完全に無視。

フロッグスケルトンの後方から、姿を見せた甲冑を着込んだ騎士。
そのサイズはテンペストよりも頭一つ高い。

だが、明らかに失望の雰囲気を見せた騎士に、トリノは笑みを浮
かべた。

「あら、女と言っても」

騎士に完全に身体を向け、更に脚に力を溜め、背部スラスターを
開放。

「わたくし」

チャージ。

トリノと騎士の間にぼんやりと立っていたフロッグスケルトンの何機かが、テンペストの勢いに反応すら出来ず、木っ端微塵に砕けて吹き飛んだ。

しかし、狙いは雑魚ではない。ランスは一直線に騎士の首へ。

「ぬっっ」

騎士の声からは悔りが消えた。

地面に真っ直ぐに突き立てれば、自らの肩まで届きそうな大剣を器用に操ると瞬時にテンペストへと向ける。

「甘くはありませんわよ?」

「確かに。言うなれば可憐に咲く毒花よ」

鉄と鉄のぶつかり合う音。

しかし、それはゴングに過ぎない。

トリノがランスを引き戻し、騎士が大剣を振り上げる。

「我はドン・アントニウスなり! 名を聞かせてもらえぬか、乙女よ」

ダンスでもするように、トリノはテンペストを最小半径でクイックターン。

突き出すランスと同時に言葉を返す。

「鳥井トリノですわ。以後、お見知りおきを」

「聞き覚え無き響きなれど良き名だ」

言葉の穏やかさとは違い、トリノの刺突も、騎士の打ち込みもまた熾烈の一言。

互いの重い一撃は、相手の一撃に弾き返され、また弾き返す。人柄が見える真つ直ぐな一撃だった。

「ありがとうございます。貴方の打ち込みもなかなか悪くありませんわ」

反発に身を任せ、それでも無様に身を回す事なく、背中のマントが綺麗に映えるようにくるりとターン。

「我と打ち合えるおなごがいるとは思わなんだ。まさに花も実もある騎士よ!」

腰で遠心力に振られるランスを固定。イメージはカタパルトから打ち出される戦闘機。

音を置き去りにするほどのランスの一撃と、受ければ全てを切り裂くであろう大剣の一撃と正面からぶつかり合う。

「光栄ですわ、でも」

くるりとターン。周りを囲むフロッグスケルトン達の銃口は、全てテンペストを向いていない。

存分に一騎打ちをする気なのだろう。

「わたくしは」

遠心力をそのまま流し、空中に飛び出す。足を振り、更に勢いを付けてドン・アントニウスの間合いから抜ける。すでに大剣を振り上げたドン・アントニウスは、その巨大武器の重さ故に身動きが取れない。

「弱い殿方では満足出来ませんの」

「くっ……!!」

脚に力を溜め、背部スラスタは再び全開。

「わたくしの最大戦速の一撃、受けてくださいまし」

前に出た。

まばたき一つで費やされる程度の僅かな時間の中、速度に合わせてように腰を回し、槍を突き出した。

ドン・アントニウスの振り下ろす大剣は、それでもトリノの刺突に間に合う。

「見事……!!」

だが、それも重さが違う。

ガラスを砕くように破壊した大剣の破片を貫き、騎士の兜を弾き飛ばした。

その下から現れるのは、骨太でありながら品のかいまみえる顔。

口元にはよく整えられた髭。そして、その目にはトリノへの感嘆の光が見える。

「わたくし、駆け引き出来る殿方の方が好ましくてよ?」

「む、我は戦う事しか出来ぬ武骨者ゆえ……」

そう言って、恥ずかしそうに目を逸らした”テンペストより巨大な騎士”を、トリノは可愛いと感じたのだった。

九話 この首に城一個分の価値はある

可愛いという想いと、人間的な評価はまた違う。

ドン・アントニウスは砕けた大剣の柄を捨てると、どかりと胡座をかいて座り込んだ。

「いやしかし、トリノ嬢はお強いですな。 我の生涯、最後の敵が貴方によかった」

「え？」

からりといい笑顔を浮かべるドン・アントニウスに、トリノは着いていけなかった。

思わず呆けた声を上げてしまいが、それを恥いる暇はない。

「さ、我が首を取り、武勲となされ。 これでもティターン族の中でもその人ありとうたわれるドン・アントニウス。 我が首一つで城の一つにはなるでしょう」

「あ、あの……何を言っていますの？ わたくし、こちらの作法には疎くて……」

「おお、その見慣れぬ機体はひょっとして、とは思いましたが、貴殿は異世界人でしたか」

異世界の人間からすれば、トリノ達こそが異世界の人間だ。

それに言いたい事はそういう事でもないし、ドン・アントニウスの言葉は理解出来ている。

「我らティターン族と宿敵のヒューマン族は長年、争っていません。な。ティターン族の首を取るだけの功績を上げれば、矮小で器の小さなヒューマンとて悪いようには致しますまい」

「そ、そういう事を言っているんじゃないありませんの！」

「ふむ、まさかとは思いますが」

ぎろり、と音を立てそうなほどにドン・アントニウスの目が動いた。テンペストを、トリノの性根を見極めようとするかのように。

「我に情けをかけているのか」

「違います」

「武運拙く敗れたとはいえ、我も誇り高きティターン族の一柱。十のティターンを率い、千のフロッグスケルトンを操っております。そんな我が敗北し、どの面下げて祖国に戻れと仰るのか」

朗々と、詠うように語るドン・アントニウスの表情は厳しい。

しかし、そこには隠し切れない喜びが見えた。

それは終われる事への喜びか。

「そんな恥辱にまみれるよりも、九十九の戦場を駆け抜け、未だ負け知らずだった我を打ち破りし勇者の手で討たれたいと思うのは、武人として当然の事」

ドン・アントニウスはテンペストのランスの穂先を掴み、自らの首元に突き付ける。

「さあ、我が首をトリノ嬢の誉となされよ」

「わたくしの言葉も聞きなさい」

無様にランスの先が震えている。それはドン・アントニウスにも伝わっているだろう。

しかし、彼は何も言わず、周りを見渡しても敵だったはずのフロツグスケルトンは、一機残らずは銃口を空に向けている。

よく見ればドン・アントニウスに似た甲冑がいるが、彼らも動かない。

そして、ザム側まで動きを止めていた。

オルマが時間を止めたような超常の力ではない。誰もが自分達の意志で動きを止めている。

赤矢達はすでに軍の間から抜け出し、トリノを助けに来れそうにはない。

「……助けに？」

トリノは自分の思考に引っかけかりを覚えたが、ドン・アントニウスは思考を進める時間を与えてはくれない。

「確かに初めて敵の首を討つ時、怯える気持ちはよくわかる。我もそうだった」

「……怯え」

ドン・アントニウスは丁重な言葉使いをやめ、後進を諭す先達のように話始める。

「しかし、それを乗り越えてこそ真の勇者となるのです」

そう語るドン・アントニウスの姿には確かな誇りを感じた。
そして、それは、

「さあ、トリノ嬢」

「わかりましたわ」

トリノはドン・アントニウスに掴まれていたランスを引いた。

「うむ、それでいい」

ドン・アントニウスは目を閉じなかった。

人生最後の見事な敵を、しっかりと見据える。 口元は僅かに笑
みを浮かべ、晴れやかな表情だ。

「我が人生、なかなかの物であつた！」

トリノはテンペストを加速させた。

「やかましいですよ!」

「ぐおっ!?!」

フルチャージから繰り出されたのは、腰の入った文字通りの鉄拳。テンペストの拳はドン・アントニウスの鼻骨をへし折り、その衝撃は脳を揺らし、巨体を地に沈める。

「貴様ア! 敗者をなぶるつもりか!」

フロッグスケルトンが一齐に銃口をトリノに向け、騎士達が剣を抜く。

「はあ?」

しかし、トリノに恐れはない。

「少し黙っていなさい。わたくし、そろそろ本気で怒りますわよ」

騎士達は鼻血の海に沈むドン・アントニウスを見て、これがまだ本気でないのかと考え、沈黙を守る事にした。

あくまで思考する時間を望んだのであり、恐怖のせいでは断じて

ない。

「起きなさい、ドン・アントニウス」

「くっ……貴様、何を」

「わたくしは起きると言いましたわ!」

怒れるトリノはドン・アントニウスの襟首を掴み、無理矢理引き起こす。

「さっきから黙って聞いていれば、好き放題言ってくれますわね!」

「ぬ、しかし、それは」

「貴方がたのやり方なんて、わたくしの知った事ではありませんわ!
! 武勳? 犬にでも食べさせておきなさい!」

そんな事より、とトリノは言葉を切った。

「戦う事は楽しいでしょう!」

戦場にトリノの言葉が響き渡った。

そのあまりの言葉は、ざわついていた戦場に沈黙をもたらす。

『な、な、な、何を言ってるんでござるか、姉上!?!』

悪辣からの通信が入るが、その無様に慌てふためく彼をトリノは鼻で笑った。

「知らないとは言わせませんわ。強敵を打ち破り、自らの証を立てる事に心地よさを感じませんのですの?」

「それは……あるが、だからこそ貴殿は我の首を」

「やかましいですわ!」

「ぐほっ!? ……な、何故」

突き刺さるようなボディブローの衝撃が、装甲を抜けてドン・アントニウスの肝臓を揺らす。

耐えられる限界をはるかに超え、腹を押さえ膝をつくドン・アントニウス。

脂汗が流れる額は、苦痛をこらえるために地面へとこすりつけている。

「わたくしが話してるんですよ。お黙りなさい!」

「問いかけたのはトリノ嬢ではげふえ!?!」

ドン・アントニウスの後頭部を、テンペストの脚が踏みつけた。

「わたくし、さきほどいけ好きな男に無様に敗北いたしましたわ。しかし、わたくしは絶対に再戦し、勝つつもりです。それに菜月というライバルをこてんぱんに打ちのめし、跪かせるつもりですの」

「え、私あんな風にされるの?」

菜月の声も無視。

「それがなんですか、大の男が一度負けたくらいでピーピー喚いて！ 情けないとは思いませんか！？ 百回負けようが、百一回目に勝てばいいでしょう！」

土に顔を埋めたドン・アントニウスの襟首を左手で掴むと、再び引っ張り上げた。

「それに貴方がいなくなってしまうえば、わたくしと打ち合える相手が一人減ってしまって、寂しくなってしまうすわ」

テンペストの胸部装甲が正中線から二つに開く。

そしてトリノはコクピットを開き、立ち上がるとドン・アントニウスに可憐に微笑みかけた。

「わたくしと終わらない闘争を楽しみましょう」

敗北した誇り高き騎士を、地面に沈め、更に頭を踏みつけるなど、まさに鬼畜の所業。

しかし、トリノの笑みには後ろ暗さはなく、心底本気でドン・アントニウスに話しているのがわかる。

「一緒に来なさい、ドン・アントニウス」

トリノの微笑みは遠くから見ていた若き騎士が、思わず剣を取り落としてしまうほどに美しく、

「戦女神だ……」

誰かが呟いた。

「そして、わたくしにここまで言わせて、断るような事があるのなら」

右手にきらりと光るは、テンペスト自慢のランス。

お行儀悪く、トリノは足で操縦桿を操作するが、ランスの穂先はぴたりとドン・アントニウスの眉間を向いていた。

「今度こそ死になさい」

ドン・アントニウスは確信した。この貴婦人は今、ノーと言え
ば必ず頭蓋を貫くであろう事を。

死は恐ろしくはない。

しかし、

「レディにここまで熱くお誘いを受けては騎士たる身が断れるはず
もなし。これからは御身に仕えましょう、我が主人よ」

「ええ、仕える事を許して差し上げますわ、わたくしの騎士」

この傲慢に輝く姫君の生き様を見ず、ここで死ぬのは何とも惜し
い気がしたのだった。

心からの忠誠を抱いて、トリノに跪く事は喜びこそあれ、何ら苦
にはならなかった。

十話 国盗りとか流行らないと思う派

「アントニウス、あのザムは敵ですか？」

「はっ、あれは我々、ティターン族と長年、争ってきたヒューマンの軍でございます」

異世界人であるトリノの前に跪くドン・アントニウスは、短く情勢を伝える。

「そう……ですが、わたくしはまだ彼らを敵と決めただけではなくてよ」

主君の武勇の前では、雑兵の緑ザムは砂糖菓子のようなものだろう。

一対一で相手が出るのは近衛隊の極一部だけだと、ドン・アントニウスは判断した。

そして、トリノが技量の話をしているのではない事もわかる。

「我が主君の御心のままに」

必要とあらばティターンの敵と結ぶ可能性がある。そう言っているのだ。

そして、それはティターンを捨て、トリノの下に着いたドン・アントニウスには関係のない話。

「あら、いいんですの？」

「我は主君に着くと決めました。それに」

ドン・アントニウスは思い返す。

「今、ティターンには神がいます」

「……ひよつとして茶色の髪で薄ら笑いを浮かべた、いけ好かない自称神様ですの？」

「ご存じでしたか。 我も奴は好きませぬ」

長老達の会議により方針を決めてきたティターン族が、神とやらに従う事を決めたのは突然だった。

ふらりと現れた神は長老達を従わせ、ドン・アントニウスに兵を出す事を要求し、何の意味もない荒野に行かされる事となった。

戦場は好きではあるが、死ぬのであれば意味のある死が欲しい。そして、ドン・アントニウスに意味のある死を与えてくれるのは、あの神とやらでは絶対になく、トリノという少女だろう。

「ここは引きますわ」

「はっ」

トリノの判断は速かった。

異世界人であり、まだこの世界を知らない以上、ここで引くのは間違いではあるまい。

道も知らずに攻め込むのは、勇敢ではなく阿呆のする事だ。

そして、ドン・アントニウスを従えた以上、ヒューマンの側には絶対に着けないだろう。

それだけの首を積んできたつもりだ。

「ここから少し離れた場所に、私の隠れ家があります。当座はそこで我慢してくださいね」

「ええ、任せますわ。そして、貴方達」

トリノは呆然とこちらを見ていたティターンの騎士達に語りかける。

「一緒に来ます？」

「はっ！」

訓練よりも整った、一糸乱れぬ騎士達の返事にドン・アントニウスは次回は更に厳しくしごいてやろうと考えた。

「よろしくお願いしますわね、皆さん」

「はっ！」

「意見を具申いたします」

騎士達に微笑みかけるトリノに、ドン・アントニウスは声をかける。

一刻一秒を争う戦場で、のんびりとしている余裕はないのだ。子供のような嫉心に駆られたわけではない。

「なんですの？」

「フロッグスケルトンはあくまで魔術。人的被害はありませぬゆえ壁として使い、その間に撤退いたしましょう」

敵が逃げれば追いかけるのが軍人の性だ。今は状況がわからず、動かないヒューマン達だが、逃げれば必ず追撃をかけてくる。

「……それでいきましょう。皆さん、準備があるなら取りかかりなさい」

トリノは一瞬考え込むが、ドン・アントニウスに任せてくれると決めたようだった。

魔術への問いもなく、決断を下した。

「はっ！ トリノ様の御心のままに！」

「ああ、それと」

騎士達が持ち場に着くために走り去る中、

「案外、可愛い所がありますのね、わたくしの騎士」

「ぬがつ！？」

いたずらっぽく笑う主君の愛らしさは言葉にならないほどだが、それ以上に小さな嫉心に気付かれたという恥ずかしさに、うずくまりたくなるドン・アントニウスだった。

『愚弟』

すでにザムの射程からも、フロッグスケルトンの射程からも抜け

た所で、トリノからの通信が入る。
状況は遠く、手が出しようがない。

「嫌でござる」

『こつちへ来なさい』

先読みして即答した悪辣も、その悪辣の返事を無視するトリノ。
いきなりお互いにお互いの話を聞く気がない。

「拙者、姉上と行くより、菜月殿と行く方がいいでござる！」

「……うえっぶ」

『菜月は愚弟と行くなら反吐が出そうだと言ってますわよ』

「違うでござろう!? ぐ、偶然で……偶然でござるよなあ?」

「知らん、俺に聞くな」

動揺し始めた悪辣を無視し、赤矢は考える。

ウインドノーツに着いていけば、トリノに主導権を取られる事になるだろう。それは別に構わない。

だが、ティターン族と呼ばれる巨人達の集団から離れ、たった十人で動こうとしている彼らは間違いなく危険だろう。

そこにこのこ着いて行くのは、さすがに博打に過ぎる。
なにより、

「なあ、トリノ」

『なんですか？』

「お前は何をするつもりだ」

トップのトリノが何をするつもりなのかわからない。

『まだこちらに来て、一時間と経っていませんから、はっきりとは言えませんけれど……』

トリノは顎に指を当て小首を傾げ、

『まあ国でも盗ってみましようか？』

と、満面の笑みでトリノのはたまった。

「まあ国でも盗ってみましようか？……って、そんな誇大妄想に付き合っではいられないでござるよ！」

『あら、愚弟……やはり貴方は名前の通り、悪辣で卑怯な男ですねえ。 武士ではありませんわ』

「なんだと!？」

『武士ならここで一国一城の主になるチャンスだ、と奮起する所ですわよ!』

「むっ、確かに……」

今時、そんな野蛮人志向は流行らない気がする、と思っても文明人である赤矢は口を挟まない。

『それに今こそ菜月にいいところを見せるチャンスではなくて？
一城の主になって迎えに行けば、これでぐっと来ない女はいま
せんわ！』

「なるほど！」

「ちよろいなー、お前」

赤矢の思わず漏らした呟きに悪辣は気付かない。
頬を赤く染める悪辣は勢いよくまくし立てる。

「菜月さん、拙者は一人前の男になって……必ず帰ってくるでござ
る。その時は話したい事があるのでござるよ！」

「……うえつぶ」

菜月は吐き気を我慢しているのか、まったく話を聞いている様子
はない。

そして、それに気付かないのが鳥井悪辣という男なのだと再確認
した。

「それではまたお会いしましょう！ アディオス！」

「アディオスは再会が難しい相手との別れの言葉だぞー」

赤矢の話など聞く気もなく、悪辣は来た道を駆け戻る。烈風の
装甲はそれなりに厚く、それなりに足も速いため、ザムのマシンガ
ン程度ではなかなか撃破される事もないだろう。

『赤矢』

「あ?」

『守りなさい』

「言われるまでもねえよ」

赤矢は男だ。古臭い考え方かもしれないが、男が女を守るのは当然だと思う。

その気持ちは危険な異世界に來ても、微塵も揺らぐ事はない。

『そして自分も守りなさい』

「努力はする」

『わたくしのありがたい忠告は聞いておいた方がよくてよ。あと』

「お前は俺のママか」

赤矢の軽口に答えず、トリノは本当に機嫌の良さそうな笑みを浮かべ、

『餞別代わりですわ……行きなさい、フロッグスケルトン!』

「おい、てめえ!?!」

戦場を逆走する悪辣にザム軍の注意が向いた瞬間、トリノは動いた。

千のフロッグスケルトンは一斉に前進を開始。慌てて撃ち返す

ザム達の銃弾に、装甲を食い破られようと前に進むのをやめよう
としない。

破れた装甲の先には内部構造はなく、ただ空っぽ。
走りながらの射撃は腕のないパイロットでは難しい。腕がない
どころか、パイロットの乗っていないフロッグスケルトンではなお
さらだ。

アサルトライフルから放たれる銃弾は、どこに飛んで行くかわか
らない。

しかし、スケルトンの名を冠するに相応しく、その身を砕かれな
い限りは足は止まらず、ただ突撃あるのみだ。

『それでは皆様、また戦場でお会いいたしましょう』

大混乱のザムを無視して、トリノは優雅に一礼。

『貴様ア！ 拙者ごと狙わせおつたでござるな！？』

『信じてましたわ、無事に抜けてくる事を！ ほほほ』

『絶対、あとで泣かすでござるー！』

姉弟のじゃれ合いをしながら、悪辣は見事にフロッグスケルトン
の群れを正面突破。

スピードを落とさず、小器用に密集地帯を抜ける技量はさすがと
思うが、毎回格好ついている場面で格好付かない辺り悪辣らしい。
鳥井姉弟とティターン族の騎士達は、かなりの速度で戦場を離脱
していき、ザムどころかラスティネイルでも追いつけそうにない。

「兄さん、この後はどうしますか？」

「どうしますかって……どうすつかな」

まったく知らない土地を逃げ回っても、すぐにろくでもない事になるだろう。

食料もない、金もない、今はまだ機体を動かせるが燃料がどうなっているかわからない。燃料が何なのかすら赤矢は知らないが、それに整備もなしにどれだけ動き続けるのか試そうとも思わない。

「どうすればいいと思う、きいろ」

情報が足りない事を、赤矢は痛感した。

「あ、いえ、それよりもまず」

「その怪しい連中、動くな！ 貴様らティターン族の仲間か！」

若い男の声。 怯えよりも闘志が前に出た声だと感じた。

「oh……」

トリノ達に注目し過ぎて、ザムの一部が近付いているのに見落としていた。

元々、使い物になるレーダーが着いている機体は菜月の指揮官用ザムしかなく、菜月が使い物にならない以上は赤矢が周りに気を配るべきだったと内心後悔。

十機ほどのザムが赤矢達を取り囲み、その銃口を向けている。だが所詮はザム。切り抜ける気ならなんとでもなるはずだ。

「貴様らは何者だ！ どここの所属だ！」

「あー、俺達は」

切り抜けた所で先はない。

この際だからザム側に着くしかないか、と赤矢は考えた。

「手土産の一つでもありゃいいんだけどよ」

手土産は大事だ。

手土産の一つでもあれば、相手に悪い印象を与える事は減る。

今の赤矢達のように敵か味方かわからない連中なら特に。

「隊長、フロッグスケルトンの一部がこちらに向かっています!」

「なんだと!？」

銃を赤矢達に向けるべきか、フロッグスケルトンに向けるべきか迷うザムを見て、赤矢はほくそ笑んだ。

「ピンチはチャンスってやつか、これ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8194y/>

バーサスゴッド ver1.12

2012年1月14日17時45分発行